
コズミック・イラに転生者多数発生

結晶犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コズミック・イラに転生者多数発生

【Nコード】

N3043Y

【作者名】

結晶犬

【あらすじ】

『機動戦士ガンダムSEED』の世界に、不特定多数の転生者が発生した模様である。彼らは皆それぞれ生きていく。チート能力なし、あるのはただ自分の体と原作のストーリーと大まかな歴史の流れのみ。彼らはたったそれだけで何をなすのか、これはそういう話である。

第一話【テイクオフ】（前書き）

この度は、この小説をご覧になって頂き、真にありがとうございます。

このSSは、転生ものです。

ただし、チートはありません。神様とかそんなの出ません。
ただ純粹に転生者たちが戦っていくお話です。勿論、原作キャラも出ます。

原作キャラの家族になったりするものもあります。転生者達も簡単に死んだりしたりします。

それでも良いというお方は、どうぞ。

第一話【テイクオフ】

ラグランジュ

L5に浮かぶ銀色に輝く砂時計。プラントと呼ばれるそれは、勿論のことだがただ浮かんでいるのではない。

スペースコロニーと呼ばれる建造物の一種であるプラントは、従来の形状の密閉型のコロニーとは異なり、新世代コロニーである砂時計の形をしている。

そして、そこに住む者らもまた、今までの人類とは少しばかり違う者達であった。

コーディネイター。そう呼ばれる彼らは、遺伝子を操作され、今までの人類と比べて超人的な能力を得た。そしてその名の通り、^{調停者}コーディネイターという使命を持っている新たな人類であると思っていた。

だが、『出る杭は打たれる』という言葉の通り、コーディネイターでないナチュラルと呼ばれるコーディネイターでない旧人類の権力者達は、コーディネイターを恐れた。何れ彼らコーディネイターが、自分達の地位を奪うのではないのかと。

だからこそ、ナチュラルである彼らはコーディネイターを排斥した。その結果、安住の地を求めたコーディネイターは宇宙に進出した。

元々、ナチュラルに比べて身体能力が高いコーディネイターは宇宙でその力を思う存分発揮した。そして、作り出したのだ。彼らは、自分達の国プラントを作った——はずだったのだ。

悲しいことではあるのだが、確かにプラントを作ったのは紛れも

無いコーディネイター達だ。だが、プラントを作るための資金を出したのは？　そしてプラントを実際に所有しているのは？

答えはナチュラルだ。プラント理事国と呼ばれる国々が、プラントを所有しているのだ。

手にしたと思っていた自分達の国。確かに実際には違いかもしれない。だがそれでも理性で理解していたとしても、彼らの感情は納得するだろうか？

その答えは、納得しなかった、だ。

例え新人類だの、コーディネイター等調停者と言われていても、彼らもまた、人間であったということなのだ。

そして、C. E. 69年9月6日。

この日を境に、遂に世界は動き始める。本来ならいる筈のない存在とともに。



チクタクチクタクと懐中時計の秒針が動き続けるのを、黒髪の男——アレクサンドロ・スターリンは両手でしっかりと持ちながらじっと見ている。

そして、秒針が時を刻む音は異様なほど彼がいる室内の中に響き渡っていた。

外からの音は一切無い。何故なら、彼がいるのは宇宙船——より正確に言えば、宇宙駆逐艦の艦橋ブリッジだからだ。故に、彼が座るシートシートの近くにある壁の向こう側は宇宙空間であり、真空空間であるそこに音など無い。

「遅れまして、申し訳ございません」

ずっとそのままの沈黙の時間が過ぎていくのかと思いきや、四十代くらいの灰色の髪が目立つ男が後ろから話しかけず々と続いていた沈黙を破った。

「構わんさ。特に問題も無いからな。座りたまえ、シリウス艦長？」

「了解です。スターリン将軍」

シリウスと呼ばれたその男の名は、シリウス・アレクセーエフ。アレクサンドロに言われた通り、彼はこの艦の艦長であった。

だが、先ほどの会話の内容を考慮するに、二人の立場は明らかにアレクサンドロの方が上であるようだ。

だが、それは特に問題ではない。プラントでは能力が高い者が上に行く。遺伝子进行操作されて世に生を受けたコーディネイターは、能力の高さが社会での地位を指し示すと考えているからだ。無論、それは分野ごとによってだが。

そして、シリウスが艦長という役職で、アレクサンドロが将軍ということとは、アレクサンドロの方が能力が高いということを指す。

「……しかし、未だ動きが無いというのは、少々怖いすな」

艦長席に座ったシリウスはアレクサンドロにそう問いかけた。

「おいおい、そう簡単に動くような馬鹿じゃないんだ。曲がりなりにも、向こうはプロの軍人だぞ？」

「ですが、発表から既に六時間。そろそろ、何らかのアクションを起こす筈だと思うのですが…」

「動くさ。地上にいる権力者達は、どいつもこいつも自分達の權益を守ることに關しては世界中探しても、奴等の上に立てるような奴はいないよ」

何が面白いのか、クククと不適に笑うアレクサンドロにシリウスは少しばかりため息をつく。

「まっ、どちらにせよ、俺達Z A F Tがやることは変わらんさ。ただ敵を殺す。効率良く……な」

その言葉に艦橋ブリッジの空気が重くなる。分かっていたとしても、クルーの間には少しばかり罪悪感があるのだ。そう、この後何が起こるか知っている彼らは。

「……その通りで御座いますな。我々はプラントの剣。武器はただ、相手を最も効率良く殺す方法だけを考えていればよろしいですな」

「そうだぞ。分かっているじゃないか、シリウス」

クククと、いかにも悪役という言葉が似合うような笑みを浮かべながらアレクサンドロはモニターを見る。

そこに映し出されているのはプラントの象徴とも言える白銀に輝く巨大な砂時計と、縦にあるコロニーとはまた別にある横に並べられたような一つのプラントのコロニーほどではないにしても、巨大な宇宙ステーションが映し出されていた。

アレこそが、アレクサンドロ達ZAF^Tが狙うプラント駐留艦隊がいる軍事ステーションである。

「……………七年、思いの外、長かったですな」

「……………そうだな…」

唐突にシリウスが呟いた。今の一言がどういう意味なのか、それはこの艦橋^{ブリッジ}にいる全員が分かっている。

今日という日が、歴史の分かれ目であるのだから。

「ッ、司令部より入電！ 『剣を解き放つ時来たり』！」

「……………漸く来たか」

オペレーター¹の言葉にアレクサンドロは笑う。彼の視線にあるモニターには先程とあまり変わらない映像が映っていたが、それは変わり始める。

「駐留艦隊が発進を始めました！」

「規模は！？ 籍は何処の国だ！？」

シリウスがオペレーター¹に問いかける。その顔には先程までの感慨深いような雰囲気は一切無い。いかにも指揮官という言葉が様になっているような顔であった。

「ハッ！ 規模は……………ネルソン級4、ドレイク級7！ 籍は…東アジア共和国です！」

その言葉を聞くとシリウスはアレクサンドロの方を見やる。そして思う。この人についてきて正解だったと。

「……………將軍」

「言わなくていいだろう？ 艦長？」

「了解です。全艦、第二戦闘配置につけ！ これより、オペレーション・テイクオフをフェイズ2に移行する！」

「了解！ ローラシアより、全艦に通達！ オペレーション・テイクオフ、フェイズ2に移行！ 繰り返す、フェイズ2に移行！」

オペレーターの言葉に艦橋全体に緊張が走り出す。皆がそれぞれ自分達に与えられている仕事に精を出す中、アレクサンドロは一人ただ先程と同じように懷中時計を眺めていた。

だが、先程とは少しだけある一点が違う。今度は笑っている。顔に笑みを浮かべながら、アレクサンドロはじっと懷中時計を見ていた。



一方その頃、プラントユニウスセブンの宇宙港にある倉庫のとある大きな部屋に四十名程度の人間が集まっていた。部屋の奥にはプラントを模した旗があり、ここがZ A F Tの関係者達が集まっている場だと思わせる。

皆、これから起こるであろう戦いに、意気揚々とした心境なのだ

ろう。暗い表情の者は殆どいない。

無論いるにはいる。その中の一人、アルベルト・ホークは壁に背を預けて、ただ他の者達が意気揚々としている姿を見ていた。

アルベルトはあの輪の中には入れない。確かに入ろうと思えば入れなくは無いのだが、何故だか彼の心がそれを邪魔する。

これから自分が行くのは戦場。運がなければ、戦うことすらできずに死んでいくことすらある。それをアルベルトは分かっているからこそ、あそこまで能天気になれないのだ。些かネガティブに考えすぎではないかと彼自身も思っているのだが、どうしてもこれだけは直せないと、彼自身前からよく思っているのだ。

「なーに、ポケットーとしてるのよ。アンタ」

「…………エリザベス…」

自分に向かってきた声に反応して顔を向けてみると、右隣に訓練校からの友人であるエリザベス・リドリーがそこに立っていた。

「…別に、なんでもないよ」

「なんでもない……? だったら、そんな暗い空気出さないでく
んない?」

「……そんな空気出してたかな?」

「出してた」

「ハハ、そっか」

乾いた笑い。だがそれが、アルベルトの心境を表していた。

それ故にだろう。それ故にエリザベスは問いかける

「……アンタさ、そんなに死ぬのが怖いんなら、何でここにいるのよ？」

「……え？」

エリザベスの問いかけにアルベルトは一瞬答えることができなかった。

まさか、出撃前にそんな質問をされるとは、アルベルト自身微塵も考えていなかったからだ。

この問答は今までも二人の間であった。そして、何時も言われてアルベルトも思い出す。答えなんて決まっていたことなのだ。

「……守りたいから」

「……でしょ？ だったら、しゃんとしなさい」

「ありがとう。エリザベス」

「………つたく、毎回世話が焼けるわよ」

この会話もいったい何度になるのだろうか？ そう思いながらエリザベスは気づく。アルベルトがエリザベスに向かって拳を突きつけていることに。

「何これ？」

「えっと、気合を込める的な？」

「……ハァ~~~~。分かったわよ」

そう言つて、エリザベスも拳を合わせる。

「生きて帰る」

「ハイハイ、分かつてるわよ。やられないように気をつけなさい？
主人公？」

「ん。ありが「聞けお前ら！！　オイ、聞け！！　これから作戦を説明すっぞ！！」……」

ありがとう。そう言おうとしたアルベルトであったが、突然やってきた男の声によってそれを言うことはできなかった。

「ふふ、じゃあ、また後でね」

そう言つてエリザベスはアルベルトの元から離れて彼女の所属している隊の元へ行った。

そしてアルベルトもまた、自分の隊の元へと向かったのであった。

先程の声の主であろう褐色の男をはじめとする男達は部屋の奥に立ち、今まで部屋にいたアルベルトたちはそちらへと集まった。

「まず、自己紹介からだ。俺の名前はデューク・エルスマン。とりあえず、お前達の上官、つまり大隊長だ。分かったな？」

デューク・エルスマン。ぶっきらぼうにそう名乗った時、アルベ

ルトはエルスマンというファミリーネームに引っ掛かりを覚えた。

エルスマンという名前を聞けば、プラントにいる九割九分の間人は次の人間の名を上げるだろう。タッド・エルスマン、と。だが、九割九分という言葉の通り、別の人間の名を上げる者もいる。その内の一人がアルベルトだ。

では、誰の名を上げるのか？ そう問われれば、アルベルトはこう答える。ディアッカ・エルスマン、と。

ディアッカ・エルスマン。タッド・エルスマンの息子であるのだが、今はまだプラントで学生という身分の筈だ。故に、アルベルトが彼のことを知る術などない。

しかし、現実としてアルベルトはディアッカ・エルスマンのことを知っている。だがそれは、アルベルトだけではない。先程のエリザベスもそうだ。他にもこの場にはいる筈だろう。アルベルトやエリザベス同じ存在が。

「早速だが、時間が無い。作戦は簡単に説明する。一度しか言わねえぞ。よく聞きやがれ!!!」

その言葉と同時に部屋の明かりが消え、スクリーンが下りてきた。スクリーンに映し出された映像には、簡略化されたプラントの絵と連合の駐留艦隊の軍事ステーションの絵があった。

「これが、ユニウスセブン。今俺達がいる所だ」

レーザーポイントで示されたプラントの絵にユニウスセブンと書かれたマークが表示される。

「それで、これが駐留艦隊。今は二つに分かれている」

大きな凸と小さな凸が前後に少し距離をとる形でユニウスセブンに向かっている。

「先行している艦隊は東アジア共和国の艦隊。んで、こっちが残り
の大西洋連邦やユーラシアの連中だ」

そこまで言って、何故かデュークは自身の拳を握り締め始めた。

「俺あ、今日この日を絶対え忘れねえ。お前らもそうだと思っ
てる」

突然語り始めたにもかかわらず、皆は真剣に聞いている。

「ワクワクが止まらねえんだよ。もうすぐ死ぬかもしれねえっ
ていうのに、俺あ、ワクワクが止まらねえんだ。お前らもそう
だろう！？」

デュークの問いかけに皆が黙って頷く。死など怖くない。我々
これから英雄になるのだからと。

「敵がどんなにしようと、俺は負ける気なんざいっさいねえ！！
俺は、このプラントを守るって決めてんだ！！ お前らもそう
だろう！！？ そうだってんなら、やるこたあわ分かって
いるだろ！！」

言われなくても分かっている。そういう表情を見せているここ
にいる者達はすでに決意を決めている者達だ。

「作戦はたった一つ！ シンプルなやり方だ！
見敵必殺！！
分かったな、テメェら！！」

サーチアンドデストロイ

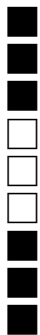
『オウ!!!!!!』

叫ぶ。皆が一斉に叫んだ。

これはたった一つの意味だ。

サーチアンドデストロイ

見敵必殺。この言葉の意味を理解した彼らは、今戦いを始める。



先にも述べたことであるが、プラント理事国とは一つの国のことではない。大西洋連邦、ユーラシア連邦、そして東アジア共和国の三カ国のことを指す。

この国々が理事国と呼ばれる所以は、単純に理事国と呼ばれている国々がプラントを建設をしたからだ。プラントはコーディネイターの国と呼ばれているが、そう呼ばれ始めたのは十年ぐらい前からで、実際の所、C・E・69年の今でも正確には理事国が所有しているコロニー植民地なのだ。

だからこそ、彼らは得たいのだろう。独立を。自由を。本当に自分たちだけの国を。

だが、例えばそう望んだとしても、理事国は決してそれを許そうとしない。

当然の話だ。誰がコーディネイターが住むプラントを作った？
いくらの費用をプラントの建設に注ぎこんだ？
そして、今なお莫大な利益を生み出すプラントを簡単に手放すような国家がどこにあるというのだ？

故に、理事国は自分たちがプラントの所有者であることを示すた

めに艦隊を差し向ける。それが、全て仕組まれたものだ気づかずに。

「先行した東アジア艦隊は、現在我が艦隊の前方、距離3000に位置しております」

「旗艦リンカーンより通信、『全艦現在の速度を維持しつつ前進せよ』以上です」

ブリッジ
艦橋にいるクルー達の言葉を聞いて大西洋連邦に所属するネルソン級宇宙戦艦ノリスの副長トモコ・サイオンジ大尉は、腕を組んで今のこの状況について考え始めた。

今回の作戦——ユニウス制圧作戦は、いつもとは何かが違うと彼女は思っていた。

普段の彼女ら駐留艦隊の仕事といえば、プラントの内部で反乱が起きないかチェックをする程度であって、今回のような『制圧』等という物騒な言葉は使われることは無いはずなのだ。

だが、今回のこの作戦は、作戦名にもある通り『制圧』が目的なのだ。

明らかに異常。こうした案件であれば、ただ威嚇行動に出ればいいだけのものを態々一番相手を刺激するような行動をとる。

これが、彼女と同じ存在の指示によるものなのかそれを確かめる術は今のトモコにはない。

だが、ある程度は予想できたことであつた。駐留艦隊上層部——いや、そのもつと上にいる者の中に彼女と同じ存在がいることはなんとなくであるが、いるという事だけは分かる。さもないければ、駐留艦隊がこんな、全ての艦艇を合わせれば一個艦隊以上もの戦力

を用意していることはないはずだ。

元々、トモコは月にある大西洋連邦の一大拠点プトレマイオス基地に配属されていたのだが、去年突然の辞令により、緊張状態にあるプラント駐留艦隊に配属されることになったのだ。

政治的に見て、この判断は愚策としか取れないだろう。いくらコーディネーターが嫌いであろうとも、プラント理事国は今やプラントから供給されるエネルギーや工業製品なしでは社会が成り立たなくなってきたしまっているのが現状なのだ。

それを態々刺激させるようなことをすれば、いったいどんなことを起きるというのか？　それが分からない程、理事国の国家の政治家は無能ではない。

だがそれならば何故、理事国は駐留艦隊の数を増やし、今回に至っては武力を振りかざすような真似をするのか？　それを理解できるのはこの駐留艦隊ではトモコぐらいかもしれない。

「随分と難しい顔をしているじゃないか。どうかしたのかね？」

「…艦長。いえ、別に……大したことではないです」

ずっと考え事にふけっていたせいか、この艦の艦長であるレガー・アイゼンハワーがその優しそうな目でトモコを見やる。

「……………そうか。では、あまりそのような難しそうな顔は艦橋^{ブリッジ}ではないことだ。艦のクルー達に不安が広がるぞ」

そう言われ、トモコは周りを見るが、クルーの顔には不安の表情は無い。寧ろ、笑っている。まるで、娘を見ているかのような微笑ましさだ。

「リラックスできたかね？」

ニコニコと笑うレガートにトモコの顔にも笑みが浮かぶ。

どうやら、自分はかなり緊張していたらしいと気づいたトモコは札を言おうと思い、レガートが座っているほうに顔を向け口を開いた瞬間――艦の前方が光った。

「ッ!？」

振り向く。何があったのだと振り向いた時、彼女は目を見開いた。

丸い光。あれが爆発の光だとトモコが気づいたのは直ぐだ。爆発の光は一つだけではない。十、二十、いや三十はあるだろう。

「オペレーター！状況を確認しろ！」

ブリッジ
艦橋の誰もが放心状態にいる中、そう叫んだのはレガートであった。

「え、あ？ あのか？」

「さっさとせんか！」

「あ……り、了解！」

オペレーターが状況を確認するべく通信を取っている中、ブリッジ
艦橋に緊張が走り続ける。

「…………今の爆発は…なんだと思うかね？ 副長」

「……ハ、ハッ、ミサイルや機雷であればレーダーで分かりますが……」

「…………しかし、反応が無かった」

「…プラントで開発された……何らかの新兵器である？」

「その可能性が高いだろう」

突然の爆発。レーダーに何も映らなかったにもかかわらず起こった謎の爆発にトモコは更に頭を悩ませた。

何を用いたのか定かではない。それが恐怖を呼ぶ。相手は『空の化け物』と呼ばれるような存在なのだ。何が出てきてもおかしくない。

だが、それでも心の何処かで恐れが生まれる。

「リ、リンカーンから入電、『東アジア艦隊の損害は微々たるものの、全艦帰還する。なお、作戦は残存する艦隊で続行する』とのこと、です」

気まずい空気が流れる。このままではまた先程のようなことが起きるのではないか？ 恐れは更なる恐れを呼ぶ。

「何を怯えているのだ？」

声ブリッジが艦橋に響いた。

皆が声の主の方——レガートの方を向いた。彼はただじっと前

を見ているだけで艦橋の方などまるで見ていない。だが、その口から発せられた言葉は間違いなくクルー達に向けられたものだった。

「諸君は軍人だろう？ 軍人であれば、命令を遂行せよ。我々の目的地は変わらんのだ。敵が何者であろうとも、先程の爆発が何であろうとも、諸君がやることに変わりはないのだ」

そう言って、黙るレガート。その顔は不甲斐無い部下達に少しばかり失望させられたような顔だ。

だが、それと対照的にクルー達の顔には先程のような恐れはない。今のレガートの言葉をどのように受け取ったかは、人それぞれだが、これだけは共通している。

任務を全うする。

軍人である彼らにとって当たり前のことを再確認した。ただそれだけであつた。

「（……そうだったな。私は、変えるためにここにいるんだ。未来を変えるために）」

トモコもまた改めて自分の目的を確認した

地球にいる家族のためにも、絶対にここで勝つてあの未来を阻止しなければならぬ。そういう思いを持って、トモコは今ここにいる。

この世界にトモコが生まれたその日から知っているこの知識。時には彼女を助け、時には彼女を悩ませたりもした。

ある種の選ばれし者。トモコはその一人だ。だからこそ、知っている。この日を境に、世界は動き始めると。



「は？ ただの爆弾……ですか？」

ローラシアの艦橋^{ブリッジ}で、シリウスはアレクサンドロから聞かされた内容について呆けてしまった。

「…ああ、さっきの爆発。ありゃただの爆弾だよ。言ってなかったか？」

「え、ええ、東アジア艦隊に何らかの方法でダメージを与え、撤退させるというのは聞いてはおりましたが……機雷ではなかったのですか？」

そう。東アジア艦隊撤退の情報は既にモニターを通じてシリウスも見ただが、あの数十にも及んだ爆発が、ただの爆弾によって起こされたものであるのなら呆けるのも当然であろう。

「当たり前だろ？ 機雷ならレーダーで簡単に捕捉されちまう。だったら、そんなレーダーが簡単に捕捉できないくらいの大きさになればいい」

「……それが、アタッシュケースに高性能のただの爆弾を……というわけですか」

「そういうことだ」

だが、実際にはそう上手くはいくはずがない。戦艦という巨大な二百メートルにも及ぶような巨体にダメージを与えるためならば、

それなりに近い距離で爆発させなければならぬのだ。

だが現実として、上手くいった。これは、他にも何らかの要因があると思ったシリウスだったが、それは直ぐに思いついた。

「……………なるほど…彼らですか」

「……………」

返事はない。だが、それで構わないとシリウスは思った。今のアレクサンドロの沈黙は恐らくだがシリウスの思いついたことが正解だという意味なのだろう。

アレクサンドロが表に動くのに対して、裏で動いている者たちがいる。それが、ザラ機関。

表向きには国防事務局と呼ばれるただの役所で、彼らの本業は国防に関する事務処理を行う部局なのだが、シリウスはそこに隠されたもう一つの顔を知っている。

国防事務局には、ザラ機関と呼ばれる直轄特殊部隊という非公然部隊を独自に所有しているのだ。

ザラ機関と呼ばれる所以は、その部隊の創設者でもあり、現在のプラント最高評議会議員の一人であり、プラント国防委員会の委員長を務めているパトリック・ザラの娘——パトリシア・ザラという女性のファミリーネームから取ったものだ。

そして、シリウスの想像の範囲であるが、恐らくザラ機関の構成員が駐留艦隊の軍事ステーションに潜入していたのだろう。そこで何らかの裏工作をした。そう考えるのが妥当だとシリウスは思った。

「東アジア艦隊、Dゾーンに到達。他の艦隊もです」

オペレーターから新たにもたらされた情報。Dゾーンという言葉
を聞いた時、シリウスは思考の世界から現実の世界に引き戻された。

「……シリウス艦長。貴官に命令を与える」

「…はっ、何でしょうか？ 将軍閣下」

明らかに今までとは違う声質。そして、変な風に演技がかった口
調でアレクサンドロはシリウスに言った。だが、ふざけているよう
な言葉とは裏腹に、その言葉は底冷えするような、冷酷な感情が入
り混じっているような声だった。

「バトレー、ルシタニア、バルトに通達。全艦第一戦闘配置」

「了解しました！ バトレー、ルシタニア、バルトに通達！ 全艦
第一戦闘配置！」

「はっ、全艦第一戦闘配置！」

復唱される命令。一気に動き始める艦橋でアレクサンドロはずっ
と右手に持っていた懐中時計を懐にしまい、もう一つの命令をだし
た。

「エルスマンにも伝えろ！ オペレーション・テイクオフ、これよ
りフェイズ3に移行する！」

「了解しました！ オペレーション・テイクオフ、フェイズ3に移
行！」

オペレーターが全ての者に伝える。

ブリッジ
艦橋の中、アレクサンドロは一人目を瞑る。

今日という日を待っていた。七年前のあの日、俺は誓った。この世界を変えてやると、どんな手段を使おうとも、変えてみせると。

だからこそ、アレクサンドロは目を開けて言う。

「……………ゲームスタート
テイクオフ！」

今、物語が始まる。

第二話【L5宙域事変】（前書き）

遅くなつてすいませんでした。

第二話【L5宙域事変】

プラント国防委員会。その名の通り、プラントの国防に関する仕事を行う役所である。

最高評議会の議場の近くにあるこの国防委員会の建物は、今極めて慌しい状態であった。本来であれば、国防に携わっているこの役所は多くの正しい情報が入ってきて、国防委員達がそれぞれ現在の状況を把握、整理するべきであったのだが、今はそれが全くできていない状態なのだ。

その原因は一つ。情報が入ってこないのだ。全くと言っていいほどに。

明らかな異常事態。確認できているのは、ユニウスセブンに伏せているデューク・エルスマン達のモビルスーツ隊からの定期連絡のみ。アレクサンドロが率いているローラシア級四隻の所在はおろか定期的に送られて来る筈の連絡がまったく来ていないのだ。

いや、本当は定期連絡はちゃんと来ている。更に約五分毎に状況を伝える為の通信は入っているのだ。ただそれが、一部の者達だけが知っているだけで、大多数の他の者達は知らないだけなのだ。

こういう風にしたのには訳がある。訳としては、単純に情報の漏洩を防ぐためだ。

今プラントが相手にしているのは、理事国というとても巨大な存在なのだ。間諜といった存在に警戒するに越したことはない。

ならば、初めから教えないに越したことはない。初めから大切な情報を必要最低限の人間以外に教えなければ良いのだ。

だが、そうなると必然的に教えられていない人間は不安になっていく。今のこの国防委員の者達のこの状況がそれを物語っているのだ。

だが、今まさにオロオロとどうして良いのか分駆らないの状況の中に、ただ一人だけ悠長にアイスコーヒーを飲みながらじっとそれを観察するかのように見ている女がいた。

壁際にある椅子に座っているその女は、周りにいる国防委員の者達と同じ武官の証である国防委員の紫色の制服を身に纏っている。だが、耳につけているイヤホンで音楽を聞き、楽しそうに鼻歌を交えながら、周りで慌しく動いている他の国防委員達ののんびりと見ているその姿は、とてもではないが国防委員の姿とは見えない。

「おや、随分と悠長に構えておいでですな。機関長？」

「ねえ、ここではそんな呼び方しないでくれないかな？」

いつの間にかやってきていた機関長と女をそう呼んだ男は、一目見ればかなりの不審者であった。

ラウ・ル・クルーゼ。他の国防委員とは違う赤色のZ A F Tの制服を身に纏うその男はそう呼ばれる人物であった。

「これは失礼しました。委員」

「…ならよろしい」

先程の呼び方は気に喰わなかったのか、今度の呼び方では特に不満な感情はない。

「……他の国防委員達は、かなり慌てている様子ですな」

「そりゃそうだろうね。情報が完全にシャットアウトされているんだから」

この二人は、今このコロニーの外で何が起こっているのか知っている。それも、漠然とした内容ではなく綿密な、それも極めて正確な情報を二人は逐一手に入れている。だからこそ、こうして落ち着いていられるのだ。

「しかし、宜しいのですか？」

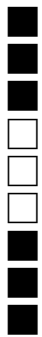
「……………何が？」

「スターリン將軍に全てを一任したことです。彼は「大丈夫だよ」……………」

クルーゼの子千葉を遮って自身の自信を口にした女に、クルーゼは閉口するしかなかった。

クルーゼの直接の上司に当たる目の前でやけに自信満々の表情で大丈夫だと言った女とクルーゼはそれなりに長い付き合いだ。だからこそ分かる。彼女の言う『大丈夫』という言葉は、本当に大丈夫なのだ。それなりに長い付き合いだからこそ、クルーゼは安心できる。

クルーゼの目の前にいる彼女——パトリシア・ザラはそういう女だからだ。



ユニウスセブンの宇宙港に灰色の巨人が四十八人いた。
否、それは人の形をしているが、人ではない。機械だ。

【ZGMF-1017】ジン。

その名称を与えられたその鋼の巨人は、何もかもが新しかった。

当時の戦術のセオリーというのは、モビルアーマーと呼ばれる機動兵器を用いて敵を撃破する。あるいは、艦艇の砲撃で敵を仕留めるといふ中世の第二次世界大戦の海戦のような戦い方がセオリーであつた。

だが、そのような戦い方でいけば、間違いなくZAFТは勝てない。地力が違うのだ。数が、物量が、圧倒的に違うのだ。

それを理解しているZAFТ上層部は、ある兵器を開発する。

それは、モビルスーツ。

後に、この世界のパワーバランスを大きく変えることとなる新兵器である。

モビルスーツが従来の兵器とは違うところ、それは何と言っても機体が人の形をしているところだろう。人の形をしていることによって、セオリーにはない攻撃——格闘攻撃が可能となる。

しかし、問題は近づけるかである。格闘攻撃は、艦艇から発せられる弾幕を潜り抜けて初めて行うことが可能であり、近づくことができれば、モビルスーツはただの人の形をしただけのただの人の形でしかないのだ。

だが勿論のこと、そんなことを熟知しているZAFТの上層部はもう一つのある兵器を開発する。それが、これから起こる戦いの重要なファクターの一つと知って。

『搭乘！ 総員、搭乗せよ！』

突然、静かだった宇宙港に管制室にいる管制官の声が響く。それと同時に、緑色のパイロットスーツに身を包む五十人ばかりの人間がジンに向かっていく。

彼らは皆一様にジンのコックピットに滑り込むように入っていく。

『アルファ1より各員、機体を起動させろ』

アルベルトもまた自分のジンのコックピットに入っている。

耳に入ってくるデュークの声をあまり聞かずにいるが、アルベルトはただ黙々と機体のOSを起動させていく。

機体が起動すると同時に、ジンの頭部のモノアイにピンク色の光が宿る。

『起動した後、合図あるまで待機せよ』

待機の命令に、アルベルトはホッと胸を撫で下ろす。この後直ぐに出撃せよと言われるのではないのかと思っていたからだ。

『チャーリー6よりチャーリー5へ、少々よろしいでしょうか？』

小隊長殿』

「ふえ？ あ、な、何ですか？ ハサンさ……あ、チャ、チャーリー6……」

今まで静かだった所に急に声が聞こえたので、アルベルトはつい呆けた声で返事をして待った。だが、直ぐに返事をするが、正しい名前を言ってしまう直ぐに言いなおすが、最早後の祭りだ。

『ハッハッハッハ！ いえ、少しばかり、小隊長殿から我らに何か激励でも頂ければと思ひまして、如何でしょうか？ 小隊長殿！』

「いや、そんな、僕は……ただ、えつとくくく」

柄じゃない。と、何時もアルベルトはそう思う。

チャーリー中隊、B小隊を率いているアルベルトなのだが、彼自身この人事に少々疑いを持っている。

本来であれば、小隊長なんて役職に任命されたことは喜ばしいことかもしれないが、アルベルトにとっては重荷にしか感じられなかった。

だからこそ、今話しかけてきているアルベルトの部下の一人、ハサン・ウラスの今のような質問にどう答えるべきか、アルベルトは何時も頭を悩ませているのだ。

『ハハ、ハサンの旦那！ アル坊に今のはキツイと思うぜ！』

『同意です。隊長に、そのような高等技術は皆無であると思います』

『そうかあ？ てか、マルコはともかくよ、エマは言い過ぎじゃね？』

『いいえ、隊長のような甲斐性なしの男性には、これくらいは言っておかねばご家族が哀れであると思います』

あまりに酷い言われようだった。

『さ、さすがにそれは言いすぎじゃないかな？ エマちゃん』

これは言い過ぎではないのかと思った先程アルベルトのことをアル坊と呼んだ若い男——マルコ・ドメニコは止めようとするが、その言葉をアルベルトたちが聞いた瞬間、エマと呼ばれた女の標的が彼に変わった。

『何ですか？ チャラ男の分際で私に意見しようというのですか？ それ以前に、私のファーストネームを呼ばないで下さい。私が穢れます。ていうか、イタリア系はさっさとピザでも食べて死んでください』

『お、俺、ピザ嫌いだもん！ あんな、チーズたっぷり、脂肪分の塊みたいな食べもん、誰が食うって言うんだよ！？ 強いて言うなら、俺ケバブの方が好きだもん！』

『民族の誇りを忘れましたか。それ以前に気持ち悪い口調で喋らないで下さい。世界が穢れます』

『ひでえ！』

『あーあー！ うっせえぞ、テメェら！ つか、隊長がさっきからボッチになって寂しがつてるから静かにしろや！』

「寂しがつてませんよ！」

『ハハハ！ 左様で御座いますか！』

ハサンの言葉に反論してみるが、帰ってきた言葉も大して反省した様子もなく、自分の言葉は全然通じないということを改めて思い知ったアルベルトであった。

だが、こうしてふざけあったりするのもひよっとしたら出来なくなってしまうのでは？ そうアルベルトは一瞬思ってしまった。だが直ぐにその考えを頭から消す。

「（駄目だ駄目だ。こんな考えじゃ駄目だ。僕たちは全員生きて帰る。生きて帰るんだ）」

頭からネガティブな考えを消す。

暗示をかけるかのように、胸の中で言葉を呟く。

次第に、実際に暗示がかかったように落ち着いてくる。

「……ふう」

『何賢者タイムに入っているのですか？ 一人で〇〇〇〇でもしましたか？』

「違うからね!？」

『ハッ!？ ってことは、アル坊が人類史上初めてモバイルスーツの中で〇〇〇〇を知ってことになるのか!？』

「君達、僕の声聞こえているんだよね!？ 聞こえていないなんてことないよね!？」

『あ、小隊長。これ録音してますので』

「ハサンさん!？ それってどういう『アルファ1より各員、発進準備はすまえたか?』……ぬゝゝ、後でその件について話しますからね!」

『りょくかい。覚えていけば』

『覚えていけば良いですが…』

『ま、そういうことだ。覚えていけば』

「……もうヤダ。この人達」

出撃前だというのにここまで疲れるのはどういふことなのだろうアルベルトだが、その答えが出るわけでもなく、ただの時間が過ぎるだけであった。

『チャーリー1より各小隊長、隊の状態を伝えろ』

「こちらチャーリー5、問題ありません」

『こちらチャーリー9、問題なし』

『了解した。チャーリー1よりアルファ1、チャーリーチーム全小隊問題なし』

『……了解した。アルファ1より各員、始めるぞ』

通信から聞こえたデュークの声とともに、今まで宇宙港の入り口を塞いでいたゲートがゆっくり開いてきた。

「アレが…ッ！」

ゲートが開いたことによって見えた。何十隻もの艦艇によって構

成される艦隊。

アレこそが敵。アレこそが、プラントを脅かす最大の敵——プラント駐留艦隊であった。

『行くぞ!! G O G O G O!!』

「ッ！」

一斉に飛び立つアルファチームのジンが三つに分かれてに散って行った。

チームは基本十二機のモビルスーツで構成されているが、戦闘中は独立した小隊毎がそれぞれ独自行動をとるのだ。

『アルファチーム全機発進しました。続いて、ブラボーチーム、チャーリーチーム、デルタチームの順に発進して下さい』

『ブラボーチーム! 全機出撃!』

管制官の指示通りに、続いてブラボーチームが発進する。未だ外では戦闘が発生した様子はないが、もう間もなくだろう。

『チャーリーチーム! 行くぞ!』

そう言って発進するチャーリー1のジンの背を見て、アルベルトも機体を発進させる。

「アルベルト・ホーク、ジン! 行きます!」

スラスターから青い光を出してアルベルトのジンは発進する。



「旗艦リンカーンより入電！ 全艦、第一戦闘配置！ 艦長！！」

「やはり……こうなるのか……」

こうなることを予見していたのか、レガートは半ば諦めた口調で呟いた。

そして、トモコもまたこうなることを知っていたにしても、少しばかり残念に思っていた。何故、こうなってしまったのかと。だが、こうなってしまっただけは仕方がないと、ある程度の諦めが彼女にもあったのも確かだ。

「……第一戦闘配置。モビルアーマー隊は発進用意だ」

「ハッ！ 第一戦闘配置！ モビルアーマー隊、発進用意！」

レガートの言葉を復唱したトモコの言葉通りに、艦内に第一戦闘配置の放送が流れ出す。

「（来るとすれば、必ずモビルスーツが来る筈……今の我が軍に、防ぐ手立ては……ないというのが、悲しいな）」

彼女は分かっているのだ。今日ここで、プラント駐留艦隊は間違はなく敗北する。それだけには変えようがない。

如何に彼女がこの先に待ち受けていると知っている地獄のような世界を防ぐためには、ここで勝つことが一番早く、且つ最も犠牲を出さなくてすむ方法なのだというのを彼女は分かっている。

だが、だが今のトモコ・サイオンジには、それをなすことができる力がないのだ。

悔しい。それはあまりにも悔しすぎたことであつた。

どんなに知識を持っていようと、どんなにこの世界にいるであろう人々のことを知っていようと、今の彼女には、それをどうこう出来る力は、あまりにも無きに等しかったのだ。

「ユニウスセブンより、多数の熱源を感知！」

「識別は！？」

「（……来た）」

分かつた。分かつてしまった。一瞬で分かつてしまった。それが一体何なのか、分かつたのだ。彼女は。

「識別は……不明！ 未確認機 アンノウンです……！」

「なっ！？ か、数はどれくらいだ！？」

「ハ、ハッ！ か、数は………よ、四十八機です……！」

「四十八機……だと！？ ……バ、バカな……」

オペレーターからの報告にレガートは言葉を失った。

当然だろう。アンノウンが——モビルスーツが四十八機もあるのだ。Z A F Tにである。

これは驚愕することだ。そもそも、現在のプラントはまだ理事国

が所有するコロニーなのだ。

理事国はプラントに対して、ノルマというものを課している。それは、プラントが軍備を整えさせないように設定したものなのだ。

しかしその中で四十八機も用意したということは、本来であれば有り得ない筈なのだ。

「旗艦リンカーンより入電！ 対モバイルアーマー戦用意せよ！ 艦長！」

「……了解した。主砲発射後、モバイルアーマー隊発進！ 敵機動兵器を撃破する！！」

「了解！ 主砲発射後、モバイルアーマー隊発進せよ！！」



『前方のドレイク級より、ミサイル来ます！』

「ヘイヘイ、わあってやすよっと！」

モニターに映るドレイク級から放たれる四つのミサイルをひらりと避けると、そのまま後方に向かったミサイルをジンの右手にある重突撃銃で四つとも簡単に撃ち落とす。

「ちよろいちよろい！」

コックピットでそう叫ぶのはデュークだ。

その言葉に偽りなどなく、デュークが乗るジンはやってくるミサ

イルや艦砲を容易く避け続ける。

「鈍いんだよ……止まって見えちまうくらいなあ!!」

そして、再び自分に向かってくるミサイルを——八発もの数のミサイルを避けようともせず正面から全て破壊した。

『敵艦より、モビルアーマーの発進を確認!』

その言葉の通り、駐留艦隊から続々とメビウスが発進してくる。

【TS—MA2】メビウス。

当時のプラント理事国が保有するモビルアーマーの中で最高水準の性能であり、また高い機動性を持つ機体として、期待されている。だが——。

「へっ、アルファ1より全機に告ぐ。最初は敵のモビルアーマーを狙え、敵の艦隊は無視だ。ドッグファイトに持ち込め、そうすりゃサンドバックだ」



簡単な任務の筈だった。

何時も通り、ただこちらの力を見せつけ、プラントのコーディネイター達の戦意を失わせるだけの簡単な任務の筈だった。

だが、ならばこの状況は何だとメビウスのパイロットは思う。

『メーデー!　メーデー!　助けてくれっ!!　後ろに付かれ……』

ぬおお!?!』

『マーク!? クソッ! 援護し…うおあ!?!』

『誰か! 誰か助けてくれ! 上に、上に…あああああああああああ…!!!!!!』

耳に入ってくるのは同じ隊の仲間達の悲鳴。

聞いている彼自身自分が生きているかどうか理解できていなかった。次々と消えていく仲間達の存在を示すシグナル。

そして、見てしまった。レーダーに映っているのは、自分のメビウスと敵を指し示すアンノウ^{ジン}ンが四機、それだけだった。

「う、うわあああああああああああ!!!!!!」

自分以外の仲間みんな死んだ。そう理解したのは直ぐだった。死にたくない! 死にたくない! 死にたくない!

スラスターを最大出力で吹かせた彼は逃げ出した。生き残りたいがために。

『ごめんねえ、死んでくれなあい?』

だが、彼の願いは叶うことはなかった。

いつの間に回りこんでいたのだろう。その人の形をしたアンノウ^{ジン}ンは、彼の乗るメビウスの直線状から近づいてきた。両手に剣を構えて。

メビウスとアンノウ^{ジン}ンが重なった瞬間、剣がメビウスを真ん中から二つに綺麗に切り裂いた。

「あ…い…い——」

嫌だ。それが、彼の最後の言葉であった。

爆発が起きる。彼の命の散り様を彩るようなその爆発は赤い色だった。



「ハア、やっぱり嫌よねえ。こういう、ワンサイドゲームっていうのは…」

爆発したメビウスを見て、そのメビウスを撃墜したジンのパイロットであるエリザベスは一人そう呟いた。

ふとリーダーを見てみれば、戦況が窺える。

戦況は圧倒的なまでの優勢な状態、ワンサイドゲームだ。無論、Z A F T 側である。

エリザベス自身、知識としてある程度は知っていたが、それにしてもここまでは思っていなかった。

「（これが、モビルスーツ……か…）」

自然と体に力が入っていたのを、彼女は知った。

初めての実戦なのだ。初めての戦争。そして、初めての殺人。

モビルスーツという存在に生で触れた時、彼女の心には歓喜の思いがあったのだが、今はただ暗鬱した気持ちしかなかった。

それほど、彼女がこの世界を軽いものだと思っていたのだが、改めて分かった。自分は人を殺したのだと。ゲーム等でやるお遊びではない。本当の生きている人間を殺したのだと。

「……………オエ…」

『ん？ エリザベス、大丈夫か？』

「あ、ハイ、大丈夫です」

『……………そうか、辛いのなら下がってもいいのだぞ？』

僚機のパイロットから心配そうな声で聞かれたが、エリザベスは我慢した。

ここで音を上げてしまったら、後々訓練校時代からの親友が心配して、また何かしら見舞いに来たりだとかして面倒だと思ったからだ。

「(……………全く、オチオチ吐いてもいられないわね…)」

親友のオドオドした顔で心配したんだとか、そんな言葉をまた聞かされる羽目になることを考えると、吐いてもいられない。そんな思いを持つ彼女は、こう答える。

「ご冗談を、そう簡単に下がれませんよ」

『ヘイヘイ、分かりましたよ。お姫様』

僚機のパイロットからのやれやれといった口調に少しばかり嫌な気分になったエリザベスであったが、聞こえたきた言葉によってそ

の考えは吹き飛んだ。

『アルファ1より全機に告ぐ、司令部がまもなくある兵器を投入する。これより、レーダーが使用不可になる。更に通信を、電波通信からレーザー通信に切り替えろ』

「……え？」

今の言葉に何か引っかけりを覚えた。

今の言葉の意味を考えるに、レーダーが使えなくなる。更に、電波による通信は使用不可になるためにレーザー通信を使えという意味だ。

だが、この言葉の意味をエリザベスは知っている。

「（嘘：アレは、原作じゃ開戦してからの筈：ッ！）」

そう思っている内にレーダーがザザと、決して心地の良い音ではないノイズとともにほとんど何も映さなくなってしまった。

「（間違いない！ Nジャマーッ！！）」

戦いは次の段階へと行く。



ネルソン級ノリスの艦橋は混乱の極みであった。
ブリッジ

何せよ、レーダーが使えなくなってしまったのだ。最早、緊急事態という範疇を超えているだろう。

「ダメです！ レーダーが回復しません！」

「通信もです！ 近くにいる艦とはともかく、旗艦とではノイズが酷過ぎます！」

レーダーが使えなければ目標との距離が測れない、目標が何処にいるのかすら分からないのだ。

これで戦えというのは、ハッキリ言って今の彼らには不可能だ。

「(まさか……Nジャマーを使うなんて……)」

Nジャマー——正しくは、ニュートロンジャマーという。

本来の目的は、自由中性子の運動を阻害し、全ての核分裂を抑制することによって、核分裂兵器や核分裂エンジン、更には原子力発電までもが使用不可能になるのだ。

そして更に副産物としてあるのが、電波の伝達の阻害である。

これによって、今トモコの目の前で起きている状況。電波を利用した長距離通信やレーダーが攪乱されるという現象が起きてしまうのだ。

「(思い出せ！ 思い出せ！ 思い出せ！ 私は今まで何も考えなかった！？ 変えるんだろう、この世界の未来を！……)」

彼女が知っている未来。このままでは、地球に住む十数億もの命が死という結末を迎えるという未来。

知っている故に、トモコには彼ら十数億の命を救わなければいけないという強迫観念に近いような思いがあった。

だがそれが、彼女をここまでの立場に上げさせる力にもなったし、これからも彼女の力となるだろう。

「艦長！」

「……何かね？」

「現在、我が軍はレーダー及び電波通信の使用が極めて困難な状況にあります！」

「……それがどうかしたかね？」

トモコの熱烈な言葉に比べ、レガートは少しばかり冷めた目でそれを見ていた。

「ハッ！ 故に、私は——全軍の撤退をするべきであると、具申いたします！」

瞬間、騒がしかった艦橋^{ブリッジ}が一気に静まり返る。

「……それは意味を理解して言っているのか？」

「ッ……ハ、ハッ！ 無論であります！」

レガートの殺意をこめられた言葉に対して、トモコはその言葉に怯みながらも言い返す。

「……我が軍のモビルアーマー隊は既に半数以上が撃墜されております！ 更には、レーダーも使用が困難なために、艦砲も精密な射撃はできません！ この状況では如何に我が艦隊でもこのままでは——」

破られる可能性がある。そう言おうとしたのだが、言えなかった。
何故なら―――。

「パープルトンより入電！ 所属不明艦が四隻、艦隊に近づきつつ
あるとのことです！！」

その報告と同時に、一隻の艦艇が大きな爆発とともに沈んだから
である。

第三話【始まりに過ぎない勝利と敗北】（前書き）

また遅くなってしまった。

というか、いつの間にか一万文字超えていたし。

第三話【始まりに過ぎない勝利と敗北】

トモコの耳に先程の報告が入る約十分前、ローラシアの艦橋ブリッジでアレクサンドルはモニターに映る映像を見ていた。

モニターには、ジンが次々にメビウスを落としている映像が映し出されており、見ているアレクサンドルの顔はご満悦といわんばかりの笑顔が広がっていた。

「Nジャマーは、想像以上の効果を発揮している様子ですな」

そう、アレクサンドルの笑顔の理由はそれだった。

本来であればあるはずのない兵器——Nジャマー。

それがあったからこそ、今戦況はZAFの優位に進んでおり、駐留艦隊に劣勢を強いさせているのだ。

「：しかし、核兵器の対策として用意していたNジャマーが、まさかこのような副産物をもたらすとは。……やはり、我々は運が良いので「違うな」……は？」

違う。それは運がいいのではないと、アレクサンドルは心の中で断言する。

彼にとって、Nジャマーというのはそういう性能があることを最初から知っていた。

だからこそ、彼は彼の仲間とともにNジャマーの製造を早めたのだ。史実では。後半年近くは時間を必要とするものを彼らは急いで作らせたのだ。

だが、初めから知っていたわけではないシリウスにそう説明するわけにもいかず、彼は別の言葉で話をつなげる。

「運なんてものは関係ない。俺達が努力し、これがその結果だ。…運という言葉はあまり使わん方がいいぞ。神頼みになってしまうからな」

「……………それも…そうですね。今時、神だの宗教など、無意味でしたな。我々コーディネイターには…」

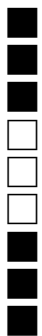
コーディネイターという人種の多くは、宗教というものを信じていない。

その理由としては、やはり彼らの超人的な能力によるものが大きいのだろう。

超人的な能力を持つが故に、何事も自分の力で解決しようとする。だからこそ、宗教や神に頼る者はコーディネイターとして間違っている。そういう考えがあるのだ。

「……………さて、そろそろ……………始めるか」

「了解です」



ローラシア級一番艦ローラシアの格納庫にそびえ立つかのように立っている六機のジン。

その中に、一機だけ他のジンの機体色である灰色とは違う翡翠色

に彩られたジンがあった。

「隊長、急いでください!」

「ちょっと、そんなに急かさないでよね!　こっちだって色々あるんだから!」

「それが、食堂で軽くメシ食べてくるですか!?　こっちが怒られるんですからね!」

「分かってるわよ!　ちょっとくらいいいじゃない…」

「何か言いましたか!?」

「何も言っていないわよ!」

既にエア―が抜かれ始めている格納庫の中を一人の女が宙を飛ぶ。無重力空間になっている格納庫では整備員達が点検等で飛んでいるが、その女が着ているのは整備員が着ているノーマルスーツではない。パイロットが着るノーマルスーツだ。

更に言えば、そのノーマルスーツもZAFの一般兵が着る緑色でもエース級の証である赤色でもない。部隊長クラスになってようやく身に纏うことが出来る白色のノーマルスーツだ。

つまり、今白服をその身に纏う彼女こそが、彼女を叱責した赤服の男の上官でもあるのだ。

「ゴメン、待たせちゃったっばい?」

「ばい?　じゃなくて、そうですよ。早く搭乗して下さい」

「アハハ、ゴメンゴメン」

反省の意思を見せずに適当に謝るも、早く搭乗してくれと促す整備兵は特にそれ以上は言わない様子だ。

無論、立場上緑服の彼が白服の彼女に意見するというのは、いくら階級がないZ A F Tと言えども流石に拙いが、いくら言っても彼女は聞く気がないというのが分かりきっているからだ。

「戦果を期待しますよ。ハシモト隊長」

「りょーかいっと。…閉めるわよ」

彼女――ミズキ・ハシモトは整備兵の言葉に右手の親指を立てて見せて答える。

「ハシモト隊長のジン・カスタム、発進準備完了！」

翡翠色のジンのモノアイが光る。それと時を同じくして、格納庫にある全てのジンのモノアイに光が灯る。

「…スーハー……スーハー…」

深呼吸をして、肩の力を抜く。瞼を閉じて、沈黙する。

「……………っし、オツケー」

目を開けた彼女の瞳にあるのは、闘志。これから命がけの戦争をするだけの覚悟の思いがあった。

「ヴァルキリー1、スタンバイオーケー」

『了解、これより誘導し……えっ？ あ、は、はい！』

「（ん？）」

突然管制官のクルー狼狽えだした。何かトラブルが発生したのか
と思い、声を上げようとしたミズキだったが、次の瞬間聞こえてき
た男の声に、それはできなかった。

『遅刻とは、随分と面白いことをやってくれたな。ハシモト』

「……げ」

その声を聞いた瞬間、ミズキの顔が凍りついた。

彼女が顔を上げてサブモニターを見る。そこに映っている顔。
間違えることなどない。サブモニターに映っているのはこの船に
いる中で最も高い地位にいる存在——アレクサンドル・スターリ
ンだ。

「も、申し訳、ありませんでした。スターリン將軍…」

すぐさま謝る。理由など分かりきっているからだ。

『今は問い詰めはしないが、後で色々と聞かせてもらおうぞ？』

「……はい…」

反省していると言う意味を込めて、先程までの元気な声ではなく
気落ちした声で返事をする。

アレクサンドルも状況が状況故にそれ以上は特に何も言わなかつ

ただが――。

『――勝ってこい』

ボソッと、聞こえるかどうか分からないような声で言った言葉は確かにそう言った。

それが、アレクサンドルから贈れる応援の言葉だとミズキが理解するのは、そう時間のかかることではなかった。

「……………オッケー。勝利の栄光を、アンタに」

『……………お前…俺を殺す気か？』

「さあ？　どうかしらね？」

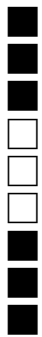
『フン、まあ期待しておくでしょう』

その言葉を区切りに、モニターからアレクサンドルの顔が消えた。

『ハシモト隊長、間もなく発進する予定です』

「……………了解」

管制官からの言葉に、ミズキは先程までの軽い調子での言葉ではなく、重く堅い意思が籠った声で返答した。



後ろでアレクサンドルが手元にあるモニターで会話している時、シリウスはただじっと待っていた。アレクサンドルが話し終わるのを。

そして、アレクサンドルが話し終わり、彼はシリウスに言った。

「シリウス、全艦主砲一斉射撃用意」

「ハッ、しかし閣下、エンジンを始動させてからの方が良いのでは？」

「それは撃った後でだ。エンジン始動と同時にモビルスーツ隊を出せ。その後もう一回艦砲射撃、その時は本気で当てろよ」

「……はい、閣下」

今の言葉の意味——最初の艦砲射撃は、ただの威嚇のようなものの。

現在、プラント駐留艦隊はデューク・エルスマン率いるモビルスーツという彼らから見れば未知の敵と交戦中にある。

そこに更に彼らの頭上からの攻撃。彼らが混乱するには十分なものだ。

「全艦主砲一斉射撃用意！ 目標、前方ドレイク級！ ……閣下、別に当てても構わないのでしょうか？」

「ん？ ああ…当てられるのならな」

シリウスの問いかけに対してアレクサンドルは明らかに挑発と見える言葉で返す。

「……では、当てて見せましょう」

今の言葉が癪に障ったのか、シリウスは少しばかり不快な感情を言葉に交えながら言った。

「全艦、主砲一斉射撃、準備完了しました！」

「よし、撃て！！」

その言葉と同時にローラシアを始めとする四隻の艦が艦砲射撃を開始された。

艦砲から放たれたビーム砲は真っ直ぐに目標であるドレイク級に向かう。

突然のことで反応できなかったのだろう。ドレイク級はいとも容易く轟沈した。

「……如何ですか？ 閣下」

ドヤ顔。シリウスの表情を表現する言葉があるとすれば、それ以外の言葉はないだろう。

「ハイハイ、良くやったよ。……次だ」

それに対してアレクサンドルはと言えば、つまらなそうな顔で適當にあしらっていた。

だが、すぐさま顔つきを変え指示を出す。

「全艦に通達、モビルスーツを全て出せ！ 敵の旗艦を沈めさせろ！
！……そうすれば、

チェックメイトだ…！」



『モビルスーツ隊、全機発進！　どうぞ！』

「了解。ヴァルキリー1、ミズキ・ハシモト。ジン・カスタム、行くわよお！」

ローラシア級の船底にある格納庫。ハッチが開かれた格納庫から、今ミズキの乗る翡翠色のジンが宇宙空間へと飛び出す。

ミズキのジンが出撃すると同時に他の三隻のローラシア級からも次々にジンが発進していく。

『こちらスターダスト1、ヴァルキリー1応答せよ』

ミズキの乗るジン・カスタムを先頭にそれに続く形で十一機のジンが続き、ちょうど編隊を組み終えたところに通信が入る。

「こちらヴァルキリー1、どうしましたか？　サトー隊長」

機体のモノアイを右の方向に向けるとモニターに入ってきたもう一つのジンの部隊——スターダスト中隊だ。

『敵旗艦を相手にする役は、そちらに譲る。こちらは露払いをしよう』

「あら、レディーに譲ってくれるの？　ありがたいわね？」

『貴官の為ではない。こちらはこちらのベストを尽くすまでだ。閣下のために』

そう言うだけ言って、サトーは通信を切り、部隊をミズキが率いるヴァルキリー中隊よりも前に出る。

『全ては、閣下の理想のために！ 悪しき権力者から、我らのプラントを取り戻すのだ！ 続けえ！！』

スラスターを全開にし、一気に駐留艦隊に向かって進んでいくサトーのジンに他のジンもそれに続く。

そして、それをモニターで見ながら、ミズキは一人誰にも聞こえない位小さな声で呟いた。

「……閣下のために…か…」

……昔は、こんな風になるなんて思ってなかったのにな…。と、愚痴を溢すような形で呟いたミズキであったが、

『隊長、我々も行きましょう』

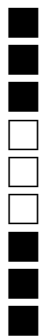
と、僚機のパイロットからそう言われすぐさま前を見た。

……今更、引き返せるわけないか。そう思った彼女は、レバーを握る両手に力を込める。

「分かってるわよ、ハイネ。ヴァルキリー1より、ヴァルキリー中隊各機。これより我々は、敵旗艦を沈めにかかる。……アンタ達？ 全員ついて来なさいよ？」

そう言っ足のスラスターのペダルを目一杯踏む。それと同時に機体の速度が一気に上がっていく。

「ヴァルキリー中隊！ 私に続けえ！！」



今この戦場にいるプラント理事国の兵士達から見て、あの巨人——ジンは、一体どのような姿に見えたのだろう。少なくとも、好意的に見えることはないだろう。

では、どのような姿だろうか？

悪魔？ 死神？ どれも当てはまるだろう。

ただ、いずれにしてもそれらに共通することは、彼ら——プラント理事国の兵士達から見れば、ジンという約全長二十メートルの鋼鉄の巨人は、自分達を殺す兵器であることだ。

「うわあああああああああ！！！！」

『死ね』

悲鳴を上げる理事国の兵士。目の前に逆さになって彼らを見るジンから聞こえた言葉は、酷く無情で、とても冷たい声だった。

ドン！ と、一機のジンが右手に抱えるバズーカ砲——M68キャットウス500m無反動砲をドレイク級の艦橋に一瞬の躊躇いもなく撃ち込む。中にいる兵士達の行く末など考えやしない。

艦橋が破壊され、更には破壊される前から傷つけられていたので

あろう船体のあちこちから爆発が起こり出す。

あつという間のことだった。一つの爆発からそれに連鎖するかの如く、一つまた一つと爆発が起こり始め、そして最後には船体の真ん中から一際大きな爆発が起こった。轟沈したのである。

『スターダスト8！ やったのなら次にいくぞ！ まだまだ獲物はある！』

『分かってますよ、小隊長。糞野郎共をブツ殺して良い気分浸ったって良いじゃないですか？』

『それは、作戦が終わってからだ』

『ヘイヘイ、分かりやしたよ』

そう言い残し、そのジンはまた別の獲物を狙いに動き出す。漆黒の宇宙に出来立ての屍を残して。

「……………フン、他愛のない。鎧袖一触とは、このことか…」

スターダスト隊の隊長サトーは、今の光景を見てそう一人呟いた。

『サトー隊長、C小隊が敵ドレイク級を撃破。ヴァルキリー隊が敵旗艦にかかりました』

「…そうか」

『いかがいたしますか？』

「無論、このまま敵を屠る。行くぞ！」

『了解！』

全ては、あのお方のために…。

サトーが心酔する男、今のこの戦場を操っている男——アレクサンドル・スターリンのためにサトーは再び戦場に向かう。



『ハアアアアアアア！！！！』

斬ッ！ という擬音が似合うようにジンがメビウスを一刀両断する。

そして、新たな獲物を求めるように周りを見渡したところ、モノアイを大きな光が照らした。

『エルスマン隊長！ アレはッ！？』

ジンのパイロット——レイ・ユウキは今の光を見て僚機であり、自身の上官でもあるデューク・エルスマンに確認の通信を取った。

「ああ、サトーのそこだろうな…」

デューク自身も爆発の大きさから簡単に推測できた。

ミサイルなんて小さなものではない。もっと大きいものの爆発。つまり——。

「サーシャが動いたか…」

『スターリン將軍がですか？』

「オウよ！ ユウキ、準備良いかあ！？」

『貴方の部下になった時から、常に準備は欠かさないようにしてきますよ』

「上等……こちら、アルファ1！ アルファ1より全機に告ぐ！
進め！ デケェ獲物は、目の前だ！ 全てブツ壊せ！！」

『了解！』

そう言ってデュークのジンは右手にあったマシンガンを左手で持ち、腰部背面にあったバズーカを右手に持つ。

「ついてきな、ユウキィ！！」

『了解です！ 隊長！』



ネルソン級ノリスの艦橋^{ブリッジ}は常に誰かの声が響き渡っていた。
それらも全て、原因は今のこの状況にある。

レーダーが使用不能になった現在、戦況の把握がほぼ不可能になってしまいう事態に陥ってしまったが、ノリスの副艦長トモコ・サイ

オンジは艦長のレガート・アイゼンハワーに次のように言った。
『近くにいる艦艇とレーザー通信でデータリンクを行い、戦況を少しでも把握しましょう』

一筋の光——とまではいかないが、その言葉はその時の状況を少しでも改善するには十分すぎる提案であった。

言われてからの彼らの行動は早かった。ノリスの近くにいた艦艇は四隻。それら全ての艦艇と相互にレーザー通信を行うことによって、何とか状況を少しだけ把握することにはできたものの、状況は極めて悪かった。

「旗艦リンカーンより入電！ 攻撃を受けているとのことですよ！」

「十一時の方向から、敵機接近！ 数四！」

「迎撃！ 取り付かせるなあ！！」

レガートが叫び、クルーがその指示に従う。

迫り来るジンは一個小隊。四機編成の小隊は、一塊になってノリスに近づく。

だが、そう易々とは近づけさせない。対空砲座が弾幕を張る。

取り付くことは諦めたのか、四機のジンはそのまま接近しようとして、何となく状況は少しだけ把握することにはできたものの、状況は極めて悪かった。

「しまっ！？」

レガートが声を上げたが、遅い。

ドン！ と一機のジンが持つバズーカがノリスに向けて撃たれる。

ドン！！ ノリスの艦内全部が揺れた。バズーカの直撃を受けたのだ。

「……クッ！ 被害は！？」

「第九区画で火災発生！」

「ダメージコントロール！ 持たせろ！」

状況は圧倒的に駐留艦隊の不利。士気は下がり、皆戦闘が始まって既に一約時間程度しか時は経っていないにもかかわらず、彼らの顔には疲労の色が目立つようになっていた。

いや、まだ約一時間と言うべきか。

この約一時間は、彼らにとって地獄のようなものだったろう。始めて見る兵器。敵の思い通りに運ばれていく戦場。レーダーが使えず、全く見えない戦場。

全てが手探りの中、自分が死ぬのをただひたすら待つだけの希望が全くとってないようなこの状況は、まさしく地獄だ。

だがそんな状況の中、最後まで生への執着を諦めない女がいる――トモコだ。

「（このままでは、全滅するッ！ 何とかしなくてはッ！）」

何とかかなると思っていた。楽観的であつたのは彼女自身分かっていたことだ。

だがそれでも、それでも自分と言う存在がいることで何とかなるだろうと、思っていたのだ彼女は。

だが、現実としてはどうだ？

現在、駐留艦隊は天頂方向からの新たな敵の出現により、一気に崩壊への道を進んでいる。

この時期存在しないと知識にあったNジャマーとローラシア級の戦線投入。これらが、トモコを絶望へと追いやった最大の原因である。

己のあまりにも酷すぎた愚かさを、彼女は呪う。

「（……何故気づかなかったのだ！？ 私以外にも何人も見てきた！ 転生者という存在を！ だったら、気づけた筈だ！ プラントにもいると！ 転生者がZAFIの上層部にいたっておかしくないぞ！）」

だが、全ては後の祭りである。

今この瞬間——トモコが考えている間も戦場は動き続けており、今この瞬間も、死んでいく命があるのだ。

「（馬鹿だ…大馬鹿者だ。私は…。救いようのない馬鹿だ…）」

後悔したとしても、時既に遅し。

「……艦長……このままでは、本艦も時間の問題です。どうか、ご決断を…」

トモコの声は艦長であるレガートぐらいしか聞こえなかったのだろう。

今の言葉に反応したのがレガートだけであつたのがそれを物語っている。

「……ふざけるな!!」

耐えられなかったのだろう。良くも悪くも実直な軍人という言葉が似合うレガートにとって、今のトモコの言葉——味方を捨てて撤退するという選択は、彼の心情が許さなかったのだろう。

艦橋のクルー達がいきなりどうしたのかと皆レガートを向いている中、トモコは淡々と言葉を続ける。

「今の我々には、ZAF^{アンソウ}Tのあの未確認機に対抗する手段は殆どありません。更には、旗艦リンカーンも攻撃を受けています。」

今我々がなすべきことは、現在記録中のこの戦闘データを月の本部にいち早く持ち帰ることではないでしょうか？」

「貴様ア！ 何だその言葉は！？ 私に、友軍を見捨てて逃げろと言うのかあ!？」

「……………はい」

断言。確かに断言した。

この言葉は、敵前逃亡を意味する言葉だ。重罪である。極刑ものだ。銃殺刑者である。

「正気か!？」

「このまま罫り殺しにされるよりは……逃げた方が、まだ生き残る可能性があります」

そう。確かに極刑を受けるであろうことには変わらない。

だがそれでも、それでもこのまま罫り殺しにされるよりかは、トモコは可能性があるほうを選んだ。

だが――。

「……私には、出来ん！」

レガートは、拒否した。

彼にとって、敵を目の前にして、尚且つ味方を見捨ててまで逃げるという行為は、耐えられないものなのだろう。

「……私は！ 断じて、味方を見捨てて逃げようとは思わん！」

「そう……ですか…」

決裂した。二人の意見はこれで完全に平行線になったのだ。

古来より、こうして互いの意見が平行線になってしまった場合、最終的にはどちらかが少しばかり強引な手段を用いて相手を屈服させて自分の意見を通すか――。

「残念です。貴方は――尊敬できる人物であった故に」

パン！ と、艦橋に銃声ブリッジが鳴り響いた。

「……え？」

誰が言ったか、確かに誰かがそう言った。

そして、クルーが音がした方を向けば、誰もが予想だになかった出来事が起きていた。

「ノリス艦長、レガート・アイゼンハワー大佐は自決された」

それは、あってはならないこと。

「よって、新たに艦の指揮を執る者が必要になった」

まさか彼女が？ 困惑しているクルーを他所に彼女は言う。

「これより、本艦の指揮は私——トモコ・サイオンジが執る！
いいな！」

頭から血を流し、無重力空間ゆえに宙に浮いているレガートを他所に、トモコはそう宣言した。



Z A F Tのモビルスーツ隊は、大隊、中隊などと言った単位で構成はされてはいる。だが、我が強く、個人個人の能力が高いコーディネイターにはそういった規律に縛られるような組織行動よりも、個人の能力を惜しみなく発揮でき、且つ仲間との強調意識を植え付けるには、一個小隊四機の編成は極めて良い構成とされている。

事実、アルベルト・ホーク率いるチャーリー中隊B小隊は、確実に戦果を上げていた。

『イヤッホオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！』

『あまり喚かないで下さい。耳が穢れます』

一機のジンがドレイク級に猛スピードで近づいていく。さらに後ろからもう一機のジンがそれに続く。

「チャーリー7、8は推進剤タンクを狙え！ チャーリー5はそれの援護！ 僕はその隙にブリッジを破壊する！！」

『チャーリー5、了解！ ミサイルを使います！』

更に、そこに二機のジンが続く。先の二機がドレイク級の機関部を破壊しに向かうのに対して、一機のジンは右足に付いている三連装ミサイルポッドからミサイルを立て続けに発射する。

しかし、全て対空砲によって防がれる。だが――。

『貰ったあ！』

推進剤タンクを狙っていた二機のジンにとって、今のミサイルが破壊されたことにより爆発が起こったことは好都合であった。それを目くらましにして、一気に外付けされている推進剤タンクに近づいた二機は持っている火器で存分に弾を撃ち込む。

すると当然のごとく、推進剤タンクは爆発するのだが、爆発が起こる寸前にドレイク級は推進剤タンクを艦から切り離すことで撃沈は逃れられる――はずだった。

「ウオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

天頂方向からやってくるアルベルトのジンがなければ。

上から垂直に刺し込まれた重斬刀は、ブリッジを完全に貫いていた。

結局、それが決定打となったのだろう。ドレイク級は艦内から次々に爆発を起こし始め、沈んだ。

『お見事です。小隊長』

「ハアハア……ああ、ありがとう…」

『お疲れのようですね？　少し休みますか？』

「冗談、まだまだいけるよ」

『了解です。では、次の獲物は…？』

『こちらチャーリー8、隊長から見て七時の方向をご覧下さい』

「え？」

『お！？　こりやすげえ、アガメノン級が沈んでいくぜ！』

チャーリー8——エマ・バティーニユの通信を聞いて、アルベルトは自分から見て七時の方向を見ると——確かに沈んでいた。駐留艦隊の旗艦である一隻のアガメノン級が次々に爆発を起こして沈んでいった。

『ハッ！　ざまあみやがれ！　ナチュラル共！』

『あまりそう言うことは言わない方がいいですよ。知性がないと思われます』

『まあいいだろ。マルコの気持ちも分からなくはない。皆、そんな考えだからな…』

沈んでいくアガメノン級を見て、アルベルトを除いた他のメンバーは話を始める。

既に駐留艦隊の殆どが撃沈、あるいは沈黙状態になっている今、
こうして話をしていること自体は特に問題はない。

「(レーダーが…使えるようになったんだ)」

Nジャマーの効果が少しずつ弱くなってきているのか、先程まで
使用不可能だったレーダーも今では使えるようになってきており、
戦場を見渡せるようになっていた。

そこで、見えるようになったレーダーで戦場を見渡そうとしてい
ると、今だ抵抗している艦艇は少なからずあったのだが、その中で
戦場から移動を始めた六つの反応があった。

「(逃げ出した……のか?)」

ドンドン戦場から離れていく六つの反応を見て、アルベルトはそ
う判断した。

そして、もうしばらくそれを見ていると、追撃をしようと思った
のであろうジン一個中隊がそれを追い始めた。

それを見ると直ぐにアルベルトはレーダーから目を逸らした。ジ
ンが一個中隊規模で向かうのなら、自分達には役目はないと判断し
たからだ。

『隊長、次の獲物を探しますか？ それとも…』

「いや、もういいや。後は他の人たちに任せる。僕達はあんまり手
を出さないようにしよう…」

『了解しやした。んじゃ、のんびり帰還命令を待ちますか』

その言葉を最後にアルベルトは周囲の警戒をしつつ、体を休めた。

「（これで……原作通り、プラントと地球は戦うことになる……）」

今の戦闘で溜まった疲れをとるように、アルベルトはコックピットの中で休んでいたところ、ふと思った。

これで、世界はアルベルトの知っている通りになってしまったのだと。

「（……って、あー、もう！ 何で何時も何時もこうネガティブになるのかな！？ ホントに、分け分かんないよ！？）」

だけど……。と、息を吐いて考える。

これで、原作通りになっていくのだと……。

「（そりゃ、中には原作通りになった方が都合のいい人がいるかもしれないけど……。だけど、そんな理由で戦争を起こしても……。良いわけないよな？）」



C. E. 69年9月6日正午

この日、プラントはユニウスセブンからテンまでの四つのコロニーを農業用コロニーへと改修すると発表。

同年同月同日午後6時27分、大西洋連邦とユーラシア連邦、東アジア共和国らプラント理事国は、発表の約六時間後プラント駐留艦隊をユニウスセブンに向けて発進させる。

その時、東アジア共和国籍十一隻の艦艇が先行。

午後6時39分、先行していた東アジア共和国籍の艦隊に謎の爆発が発生。死傷者は出なかったものの、戦闘能力が大幅に低下。一旦、駐留ステーションに帰還しようと艦隊を戻す。

午後6時43分、ユニウスセブンよりデューク・エルスマン率いる四十八機のジンが出撃。駐留艦隊と交戦状態に入る。

午後7時9分、アレクサンドル・スターリン率いる四隻のローラシア級が戦闘を開始。

午後7時11分、四隻のローラシア級より二十四機のジン発進。戦闘を開始。

午後7時49分、旗艦リンカーン轟沈。

午後7時50分、残存する戦力の内、ネルソン級ノリス臨時艦長トモコ・サイオンジの提案により、他五隻の艦艇と共に戦闘空域を離脱。

それに対し、ZAF T側はジン一個中隊を追撃に向かわせる。しかし、三隻のドレイク級を撃破するのに成功するも、残りの三隻を月のプトレマイオス基地への脱出を許してしまう。

午後7時58分、ZAF Tは臨戦態勢を解除、警戒態勢に移行する。

C. E. 69年9月6日、C. E. 史上初めてとなるモビルスーツを用いた戦闘が発生。後にL5宙域事変と呼ばれるこの戦闘は、ZAF Tの圧倒的な勝利によって幕を閉じることとなった。しかし、これで終わりではなかった。

この五ヵ月後、C. E. 70年2月10日にプラント理事国を中心とする新国家連合、地球連合はプラントに対して宣戦を布告する。

そして、転生者と呼ばれるこの世界の未来を知る者たちは、この戦争を、史実とはまた違う方向へと向かわせていくのである。

第三話【始まりに過ぎない勝利と敗北】（後書き）

誤字、脱字などございましたらご報告お願いいたします。

感想もいつでも受け付けております。

後、数日後にキャラ紹介や設定などの説明話を作ります。

設定 【第三話まで】（前書き）

一応、上げておきます。読者の皆さんが少し混乱しているだろうと思いますので…

設定 【第三話まで】

――プラント――

・アレクサンドル・スターリン （転生者）

性別…男

出身地…ユーラシア連合、西ロシア州モスクワ

C・E・69年の時点で、ZAF T軍事部門最高責任者という地位についている。

目的の為であれば、どんな手段も使う男。ただ、幼馴染であるミズキや、住んでいる孤児院の子供達に対しては甘い。

ちなみに、自分のことを主人公だと本気で思っている転生者は大嫌い。

普段の公務中の服装は、ZAF Tの黒服を改造した専用の服装である。

・アルベルト・ホーク （転生者）

性別…男

出身地…プラント、セプテンベルファイブ

C・E・69年の時は、ZAF Tのモビルスーツ小隊の小隊長という地位についている。

基本的に争い事は好まない。こんな性格であるせいか、小隊長であるにもかかわらず、部下である下記の三人からは日々弄られる日々を送る。

だが、正確に似合わず、モビルスーツの操縦の腕は極めて高く、Z A F T士官学校の第四期生の中でモビルスーツの操縦技術はトップである。

・パトリシア・ザラ （転生者）

性別…女

出身…プラント、ユニウスワン

国防事務局という国防委員会の事務仕事が主な業務である機関に属している。

だが、実際に彼女がやっていることは、破壊工作、暗殺、情報操作、誘拐等々、ありとあらゆる裏の仕事をやっている。

本人は、自身が望んでやっていることのため、特に思うところはないのだが、仕事の内容を知っている父親——パトリック・ザラは、あまり良い思いではないらしい。

・デューク・エルスマン （転生者）

性別…男

出身…プラント、フェブラリウスワン

モビルスーツ大隊の大隊長に抜擢された男。

性格は大雑把で面倒臭がり屋なところがあり、副官である下記のレイ・ユウキをしばしば困らせていたりしている。

だが、その部分を補うように、仲間に対する配慮と言うものは常に欠かさない。

更には、後輩に対して何かと気にかけてやったりするところがあったりもする。

・ミズキ・ハシモト （転生者）

性別…女

出身…プラント、ディセンベルスリー

一言で言うと、アレクサンドルの幼馴染。

ミズキの母は、ユニウススリーで孤児院を経営しており、アレクサンドルもプラントに来た当初はそこで暮らしていた。

モビルスーツの操縦の腕は高く、モビルスーツ中隊の中隊長を務めている。

・エリザベス・リドリ （転生者）

性別…女

出身地…プラント、ヤヌアリウスフォー

上記のアルベルトとは同期のモビルスーツパイロット。

同じ転生者である故に、アルベルトと初めて出会った時は彼に対

して何かと因縁をつけていた過去があったが、今はそうでもなく、普通の友人関係を築いている。

・シリウス・アレクセーエフ （オリキャラ）

性別…男

出身地…月面、コペルニクス市

Z A F T ローラシア級一番艦ローラシアの艦長。

元々は月からプラントの連絡貨客船の船長であったが、とある事情によりZ A F Tに入り、アレクサンドルの部下となる。

真面目な性格であり、上司であるアレクサンドルを信頼しており、アレクサンドルの命令は絶対であると考えている。

・ラウ・ル・クルーゼ （原作キャラ）

性別…男

出身地…L 4、メンデル

原作では、ムウ・ラ・フラガの父親、アル・ダ・フラガのクロールンとして生み出された男。

現在は、国防事務局に所属しており、上記のパトリシア・ザラの副官として働いている。

彼女に一体何を共感してパトリシアの部下になっているのか、それは現在一切不明である。

・ハサン・ウラス （オリキャラ）

性別…男

出身地…イラク

アルベルトの率いる小隊のメンバーの一人。

アラブ系のコーディネイター。

性格は豪快であり、日々を楽しく生きる男。

・マルコ・ドメニコ （オリキャラ）

性別…男

出身地…ユーラシア連邦、南ヨーロッパ州ローマ

アルベルトが率いる小隊のメンバーの一人。

イタリア系コーディネイターであり、普段は軟派な男である印象が、芯はしっかりとしている。

・エマ・バティーニュ （オリキャラ）

性別…女

出身地…プラント、ディセンベルツ

アルベルトが率いる小隊のメンバーの一人。

毒舌。まさにこの一言に尽きる女である。

・レイ・ユウキ （原作キャラ）

性別…男

出身地…プラント、アプリリウスファイブ

原作ではあまり設定などは細かくはされてはいない割には、何だかんだで重要なポストにいることは、それなりの能力があると推察。よって、この時期からいたとしてもおかしくないと思い、採用。

デュークの副官として日々苦労が続いているが、それが不服というわけではなく、純粋に彼と共に戦う日々を過ごしている。

純粋な脇役予定。

——地球軍——

・トモコ・サイオンジ （転生者）

性別…女

出身地…大西洋連邦、カルフォニア州カルフォニア

L5宙域事変時、大西洋連邦所属艦ネルソン級ノリスの副艦長を務めていた。

だが、戦闘中ノリスの艦長であったレガート・アイゼンハワーを射殺し、ノリスの臨時艦長となる。

その後、プラント駐留艦隊旗艦リンカーン轟沈後に速やかに戦域

から離脱。

月の大西洋連邦軍基地、プトレマイオス基地に向かった。

・レガート・アイゼンハワー（オリキャラ）

性別…男

出身地…大西洋連邦、ワシントン州ワシントン

L5宙域事変時、大西洋連邦所属艦ネルソン級ノリスの艦長を務めていた。

だが、戦闘中ノリスの副艦長であったトモコ・サイオンジによって射殺され、その生涯を閉じた。

――設定――

転生者達が唯一自分達が『転生者』という存在だと理解できるのは、彼ら全員に前世の記憶というものが残っているからである。

更に『原作知識』というのは、『原作』をほぼ完全に覚えており、更に細かい設定が多々ある。

これには、個人の差はなく全員同じであり、その前世の記憶や『原作知識』を忘れるということは余程のことがない限り、それはない。

第四話【敗北は次の勝利の糧】

夕暮れ時。オレンジ色の夕日に照らされた墓地に、一人の黒髪の男が佇んでいる。

黒のロングコートを着ているその男は、ただ黙ってとある墓の墓石を見ている。

「おい、そろそろ帰りたいけどー」

いつまでもずっとそのまま動かないその男に一人の青髪の女が話しかける。女性であるにもかかわらず、その女の服は何故か男物の服であった。

だが、女が言っても、男は動こうとしない。先程から変わらず、ただじっと佇み墓石を見ているだけだ。

「……む、サーシャ、僕先に帰るよ？」

「後五分だ…」

「同じ言葉、さっきも言った」

「なら、後二分でいい」

「…む、それなら良いけど、早くしてよね？」

「分かっているさ。パトリシア」

そう言つて、サーシャと呼ばれた男——アレクサンドル・スターリンは目を閉じた。彼がずっと見続けていた墓石、そこにはこう書かれてあつた。

『ケイ・タザワ、ここに眠る』

そのケイ・タザワという人物は、アレクサンドル・スターリンという人間をここまで成長させた一番の功績者といえる存在であつた。だが、アレクサンドルとその男——ケイ・タザワの二人の話はまた次の機会となるだろう。

アレクサンドル達の元に、一人の仮面の男——ラウ・ル・クルーゼがやつた来たからだ。

「失礼します。将軍、機関長。エルスマン大隊長より報告がありました。」

我が軍が、駐留艦隊がいた駐留ステーションの完全制圧に成功したとのことだ」

「ふーん、被害の方は？」

「普通に考えればあるわけないだろ。馬鹿が」

「むっ、その言い方は酷いんじゃないかな？」

アレクサンドルの物言いに反論するパトリシアであつたが、その言葉に怒気というものは全くない。ただ、ふざけ半分といった感じで言つたようだ。

「フン、無人のステーションを制圧するのに三個中隊も投入するな

んて、馬鹿のやることだ」

「……あんまり言わないであげなよ。ただでさえ、二日前の一件で皆お祭りモードなんだから……」

「それが馬鹿なんだと言っているんだよ。あんなもの、たった一回の勝利だ。そんなことで、あそこまで騒ぐか？」

「ま、お父さんたちは『勝つ』ということが今までなかったからね。仕方ないっちゃ仕方ないと思うよ？」

「それでも、限度というものがある」

そう言つて、アレクサンドルは歩き出す。そして、パトリシアとラウもそれに続く。

三人がいた墓地は大きい。プラントに唯一あるこの墓地は、プラントに唯一ある故に規模が極めて大きい。

だからこそ墓地を出るまで時間がかかる。そのため、黙っているのがつまらないのか、パトリシアが口を開いた。

「……あ、そうだ。今日はどこで寝る気なの？ サーシャは」

「ん？ とりあえず、今日は帰らせてもらう。さすがに、一週間も帰ってないと面倒になりそうなんだな」

「子供思いだね。さすがは、サーシャパパ。良いお父さんになれるよ」

「違う。たまに帰らんと、あのガキ共が何をするか分かったモンじ

やないんでな」

「でも、それを心配っていうんだよ？」

「ハッ、頭イってまってるんじゃないかねえのか？　ありえんだろ。そんなの」

「ハイハイ、ツンデレツンデレ。ありがとうございました」

素直じゃないんだから……。そう思うパトリシアを無視してアレクサンドルは歩き続ける。そしてパトリシアがそれに続き、最後にラウが歩いていく。

「そういえばだ……」

「ん？」

歩いている途中、ふとアレクサンドルが何かを思い出してパトリシアに問いかけた。

「お前、『弟』はどうなんだ？　帰ってきたんだろ？」

「え？　ああ、アスランのこと？　大丈夫だよ。帰ってきたばかりの頃は、少し落ち込んでたけど……今は元気元気」

「……そうか」

たった一言であったが、その言葉には少しばかり嬉しさが込められていた。

「…………今度またウチに来なよ。歓迎してあげるから」

「気が向いたらな」

そう言っただけで、三人が墓地を出る。

墓地を出たところで待っていたのは、十人程度の黒服達であった。

「うわー、何処のメン・オン・ブラック？」

パトリシアの言葉の通り、見事なまでの黒一色であるその光景は、常人を寄せ付けない雰囲気放っていた。

「俺の迎えだ。じゃあな」

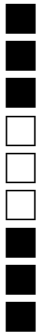
「え？ あ、うん。じゃあね」

ヒラヒラと手を振りながらアレクサンドルは黒服の一団と共に去っていく。

「…………さて、僕らも行くか？」

「お供いたします」

そしてパトリシアもまた、ラウと共に墓地を去っていくのであった。



転生者達は、やや大雑把であるが二種類に分けることができる。

一つは、原作積極的介入派。

これは、『原作』。すなわち、この世界——『機動戦士ガンダムSEED』という物語に積極的に介入し、歴史を変えようとする者達。代表して言うなれば、アレクサンドル・スターリンやパトリシア・ザラがそれに当たる。

もう一つは、原作非介入派。

こちらは、アルベルト・ホークのような、『原作』に介入しようとは思っていない者達。

しかしアルベルトのように、『原作』を知っているが故に関わらざるを得ない者達が多い。

そして転生者全体を見れば、前者の方が圧倒的に数が多い。

だが、だ。

実際に介入できた人間は極少数でしかない。

「——そう。結局、介入できたのはアレクサンドル・スターリンだ」

そう言っ、デュークは口に咥えていた無煙煙草を手元にある灰皿に押し付けた。

プラント駐留艦隊が駐留していたステーションは今ZAFТの軍事拠点と化している。

駐留艦隊が壊滅し、戦力がほぼ無きに等しいステーションにZAFТは攻撃をかけた。と言っても、既に空き家と化していたステーションを制圧することは簡単過ぎることであった。

そして今、制圧部隊一個大隊の指揮官であるデュークはシリウスと話をしている。内容は、デュークやアレクサンドル達転生者についてだ。

「それが何か問題なのですか？ エルスマン大隊長」

先程のデュークの言葉の意味がよく分からず、シリウスはデュークに聞く。

「別に問題じゃねえよ。ただ……スゲェなと思ってな……」

ハア、と深いため息をついたデュークをシリウスはじっと見つめていた。

「二年前……俺がZ A F Tに入った頃は、俺は自分が主人公じゃねえのか？ 何てな、馬鹿なことを考えを持ってたよ……」

「主人公……ですか」

「ああ、主人公だ。物語の主演。ヒロインと最後にくっつくいい男。世界を救う男。」

……挙げようと思えばキリがねえな……」

ホント、馬鹿だ……。と、目に手を置いて自身の過去に姿に呆れているデュークは思い出す。当時、デュークと同じ考えを持っていた者達がいたことを。

「あの頃はさあ……俺みたいな奴等は全員馬鹿みたいに、『俺がオリ主だ！』なんて、馬鹿な考えを持ってたんだぜ？ 今の俺から見

れば、馬鹿丸出しだって言ってやりてえよ」

「今でも、十分に馬鹿だと言っておきましょう」

「うっせ、とにかくさ、俺が何言いたいかって言うとき——やっぱ、サーシャが主人公なのかなって改めて思ったわけだよ」

「ほう、何故そのような結論に至ったのか、ご説明いただけますか？」

ああ…。と、軽い相槌を打って、デュークは語り続ける。

「まあ、純粹にアレだよ。今回の作戦——テイクオフの一件だってそうだ。アイツ、ずっと前から考えてたんだろ？」

「ええ、そう。……一年程前から…ですね」

「一年か……。そりゃ、なれるな。主人公に」

「ハハ、あまり閣下の前でその言葉は言わないほうがよろしいですよ？」

「え？ 何だよ？」

シリウスの言葉に、デュークは少し疑問を持った。

「だって、アイツどう考えても『俺がオリ主だ！』って感じなんだけど…」

頭の中で、フハハハハハ！ といかにも悪役と言う言葉が似合

いそうなアレクサンドルの姿を思い浮かべながらデュークは言うが、

「フッフ、閣下が……ですか？」

「おうともさ。言っていない？ そんなこと」

「有り得ませんよ。閣下に限って……」

「そうか？」

ええ、と言ってシリウスは言う。

「閣下は、前にこう仰いました。

『そんな、中心にいる程度の主人公なんてつまらない』とね」

「……ゴメン、意味が分からないんだけど……」

「私も初めは意味が分かりませんでしたよ。ただ――」

一拍おいてシリウスは言った。

「『世界の中心にいる程度で満足する主人公になるな。なるなら、世界を動かす悪の首領になれ』とね」

「……ハッ！ 似合いすぎだろ、その台詞。じゃあアレかよ？
アイツ『主人公』じゃなくて『悪の首領』になりたいのかよ？」

「確かに、あのお方なら……案外、世界征服でもお望みでも知れませんがね」

「似合いすぎだろ」

二人揃ってアレクサンドルが悪の首領という言葉がマッチングする格好を想像して笑う。

実に平穏な二人の会話であった。



月。

宇宙開発を行う際に誰もが一番最初に始めようとする場所というのは、月をおいて他にはないだろう。

だが、宇宙開発が進んでいるC・E・35年にある事実が発覚した。

大西洋連邦のプトレマイオス基地建設だ。

当初、国際的批判を浴びた大西洋連邦であったが、『宇宙の警察署』と開き直ることで他国からの国際批判を少しずつ減らしていた。

実際、コズミック・イラの時代で最強の国家と言えば大西洋連邦だ。だからこそ、彼らの主張は一応の説得力と言うものがあり、それにより世論も静まっていった。

そして今、プトレマイオス基地にいる軍高官達の話題に一人の女がいた。

その女の名は——トモコ・サイオンジ。

査問会。辞書で引けば、調べて問いただす会という意味が出るで

あろうこの査問会。

だがしかし、トモコが今いるこの部屋は本来であれば、軍事法廷である場所だ。これが意味すること、分からねトモコではない。

……まるで、軍事裁判だな。いや、軍事裁判だったな…これは。

「このプトレマイオス基地の司令官、トレーズ・ヴィクトリア大将である」

本来であれば、裁判官が座るべき場所に座った自らを大将と名乗った男——トレーズ・ヴィクトリアは、その真っ直ぐな目でトモコを見ている。

「ではこれより、貴官から先の戦闘——以降、L5宙域事変と呼ぶ。更に、このプトレマイオス基地に到着するまでの詳細な報告、証言を得ていきたいと思う。

尚、この査問会は軍法会議に順ずるもので、この場での発言は全て公式なものとして記録されることを申し出ておく。虚偽の無い発言をせよ。良いな？」

「はい」

「ではまずは、L5宙域事変の状況について、トモコ・サイオンジ大尉から聞かせてもらう」

ここが、ここが最大の山場だ…ッ！

トモコは意気込んでいた。ここでもし彼女が自身の敵前逃亡ともいえる行為、更には自決したと報告書に書いた、上官であったレガート・アイゼンハワーの射殺などがバレてしまえば、トモコはここ

で終わりだからだ。



「へえ、あの娘が生きて帰ってこれたっていう？」

トモコがいる軍事法廷には本来であればいる筈のない傍聴人が大勢いる。皆誰も彼もが、注目しているのだ。彼女が体験したL5宙域事変を。

だが、いくら査問会が開かれている場所が軍事法廷であるとはいえ、流石に誰も堂々と傍聴席で見ているわけではない。

皆、別室にあるモニターを通して見ているのだ。

そして、この部屋にも見ている者達がいる。

「だけどさ、本当に彼女俺達と同じなのか？ 証拠はあるのかよ？」

椅子に座っている男の一人がそう言う。

「十中八九そうだろうな」

「マジで！？ やりい！ チョー可愛い娘じゃん！ ゼッテー俺の彼女にしてやる！」

「ハッ！ バツカじゃねえの！？ オメーみてーなクズに靡くわけねえだろ？」

「ああっ！？ んだとコラ！？ もういっぺん言ってみやがれ！？」

「止めとけよ。そんな本当のこと言ったら、かわいそうじゃないか……」

「右に同じ」

「デメエら、今すぐぶっ殺してやる!!」

頭痛い…。

突然言い合いと始めだした仲間のせいで頭痛を感じている男が一人いた。

名を、ジェームズ・ノリントン。

ここにいる者達——『転生者達は集まろうの会』の中で最高階級である中佐の位を持ち、ここにいる転生者達の取り纏め役でもある。

『転生者は集まろうの会』。転生者達が集まって互いに世界の行く先について語ろうというのが、この会のコンセプトであった。

転生者達は基本的に知識はあっても、特別な力というものはない。これはどの転生者達にも共通していえることだ。

だが、一部——いや、多くの転生者達は、何故か自分は特別であると考えている節がある。確かに、転生なんていう漫画や小説だけでしか起こるはずのない超常現象がおきたのだ。その考えもジェームズは理解している。

だが、だがだ。それでも、自分がこの世界の主人公だと、そう思い込んでしまっている人間が多すぎることにについては、ジェームズにとってとても悲しいことであった。

今、ジェームズの周りで起こっているこの現象もそうだ。

彼らは互いに友好を深めて、世界の行く末というものを語るためにここに来ていいるわけではない。

純粹に、ただの情報交換。もしくは、今後敵となるかもしれない相手を知るために来た人間が殆どだ。

「なあなあ、ジェームズよお」

「ん？ 何だい？」

一人考え込んでいるジェームズに一人話しかける男がいた。

この男のことについてはジェームズはよく知っている。この会を作った時から知り合いだった転生者だからだ。ただ、正確に少しばかり難があるが。

「あの女さあ、トモコ・サイオンジってんだろ？」

「うん。さっき聞こえたと思うけど、そうだよ。トモコ・サイオンジ。日系の大西洋連邦軍人。階級は大尉。」

一週間前の、L5宙域事変から何とか生き延びた人間の一人だよ」

「んで、アイゼンハワー大佐を殺したって噂の？」

「……あんまり、そういう言い方は……」

「基地の全員が知ってるんだぜ？ あの女が、自分の命惜しさに自分の上官を殺して逃げ帰ってきたって、間違っているわけじゃねえだろ？」

「そうだけど…」

確かにそうだけど、その言い方は厳しすぎるんじゃないか？

だが、確かにそうだ。実際にトモコが彼女自身の上官でもあるレガート・アイゼンハワー大佐を殺した。公式的な記録上ではレガートは自決したとされているが、少しでも考えれば、真実は簡単に分かる。

上官を殺すというのは重罪だ。極刑に処されてもおかしくはないのだ。

だが、トモコは今も生きている。そして、弁明の余地が残っているのだ。

ジェームズは疑問に思う。

何故、トモコは今あの場合——査問会に受けられるのか？

答えは——まだ、価値があるかもしれないからだ。とジェームズは考える。

そしてそれは、見事に大西洋連邦上層部の思惑と合致していた。



「では、当時の状況についてサイオンジ大尉から説明した頂いたところで、ここからは大尉にいくつかの質問を行う。良いな？」

「はい」

長かった…。

ふう、と息を吐いた。今までのトモコが答えたことは当時の状況との事実確認だけであった。

だが、それでもこの場を渦巻く空気がトモコに安息を与えようとはしなかった。

それでも、ここまでは全て前座に過ぎない。

トモコは確信している。彼ら——大西洋連邦宇宙軍上層部が、これからトモコに問いかける質問がトモコの命の灯火を左右するのだと。

「では、サイオンジ大尉。アイゼンハワー大佐の死因についてだが、本当に自決だったのかね？」

…来た。

「はい」

「アイゼンハワー大佐の死因は、君ならよく理解しているだろう。左頭部からの一発の銃弾が頭部を貫通。それが死因だ。違うかいな？」

「……はい」

嘘。虚偽。今の言葉は偽りの真実だ。

真実は、トモコが撃った。何の躊躇いもなく、淡々と、引き金を引き、レガートを殺した。

それを彼女が後悔しているかどうか、答えは——NOだ。彼女は微塵も、一瞬も後悔等していない。

「そうか……ならば、この件に関しては、こちらからはもうない」

………ん？

トレーズの言葉にトモコは妙な思いを抱いた。

もっと何かあるのではないのか？ そう思っていたトモコは内心驚いていた。

分かっている筈だ。レガートを殺したのはトモコだと。トモコがレガートを殺したことは、臨時艦長を務めていたネルソン級ノリスの艦橋のクルー達が誰かに話した筈だ。

トモコがこの査問会に出るまでの間、彼女の周りの目が異端を見るような目つきから、トモコはそれを察していた。

だからこそ、この査問会でどんな質問にも答えられるようにと、彼女は必死に考えていたのだ。だが、これでは意味はなくなってしまった。

上層部の意図をトモコは理解した。つまりは、こういうことなのだ。

大西洋連邦宇宙軍上層部は、トモコが持ち帰ってきたモビルスーツや艦艇、そしてNジャマーの情報さえ手に入れば、プラント駐留艦隊の壊滅や上官殺しなど、どうでも良いことなのだ。

………軍隊であるが故に、この処置は当然だろう。ただ………これでは、死んでいった者達が………浮かばれんな………

「では、サイオンジ大尉。次で最後の質問としよう」

最後というトレーズの言葉に、トモコはホッと息をついた。

正直、彼女とて人間。それも、まだ二十代半ばの女なのである。こうして、大勢の人間の目に晒されているというのは、あまり気分のいいものではないからだ。

「――では、最後の質問だ。今回のこのL5宙域事変において、ZAF Tが使用した新型兵器――これは、モビルスーツというらしい。この兵器、貴官はどう思う？」

「……ハッ…それは…」

この質問は解答に困る。

何故なら、この質問自体が漠然としたものであるからだ。

どう思う？ モビルスーツの何がが問題であるのだ。

だが、もう一つトモコは疑問に思った。

何故、こんな場所で聞くのかと…。

「質問の内容が少し悪かったな。

私は、この新型兵器――モビルスーツに対して、我々は現状の兵器のみで勝てるのか？ 私はそういうことを聞きたいのだ」

バカな…ありえない。そんな重大なことを、私のような尉官の人間に聞くのか！？

驚愕した。本来であれば、軍上層部の人間達とその道の専門家達と話し合うべき内容を、あの男――トレーズ・ヴィクトリアは、大尉という尉官の人間に聞いたのだ。それも、査問会という場所だ。

「わ、私のような者には…」

「答えられない……と言うのかね？」

「ッ!？」

瞬間、トモコの体に悪寒が走った。思わず、前を見上げた。トレーズの顔を。

その時、トモコは見た。トレーズの顔を。

トレーズの顔にある。まるで、これから処刑される人間がどのようにして言い逃れをするのか楽しんでいる顔だ。

……そうか。私に逃げ場は、無かったのだったな。ここに立った瞬間から。

「私は――」

皆が見ている。ただでさえ静まり返っていたこの査問会は、今、舞台のクライマックスを迎えるかのように、トモコ一人に衆人の目という名のスポットライトが当てられている。

……ゾクッ……。

……何だ…？

言い始めようとした瞬間、トモコは何かを感じた。

……今、体が？

寒気とは真逆の、興奮するような感覚。体が何かを感じている。流れを感じるような、何か大きな川の真ん中に立っているような感覚。これが一体何なのか、トモコは全く分からなかった。

だが、直ぐに理解した。これが——時代を動かしているのだと。

今、彼女の言葉が大西洋連邦の——ひいては、地球軍全ての兵士達の命がかかっているのだと、今、トモコは理解した。

「——私は、現状の戦艦とモビルアーマーのみの戦力では、地球にある全ての国家の戦力を用いたとしても、苦戦は免れないと思います！」

「……ほう？」

「Z A F T の新型兵器——モビルスーツの性能は、我が軍のメビウス五機でようやくモビルスーツ一機分の戦力になると思います！」

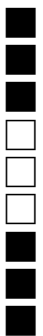
「……では貴官は、モビルスーツの存在が大局を動かすと——そう言いたいのだな？」

「——ハッ！ 小官は、そう考えております！！」

「……分かった。質問はこれで全てだ。

これにて、査問会を終了とする。長時間の質疑応答ご苦労であった」

「ハッ！」



C. E. 69年9月13日、大西洋連邦宇宙軍大将トレーズ・ヴィクトリアは、大西洋連邦首都ワシントンにある国防総省に以下の言葉を送った。

Z A F Tの新型兵器、モビルスーツの性能は我が軍の兵器を遥かに凌駕する。

故に、今後を考えれば、モビルスーツの存在が大局を左右する可能性が高く、早急に、我が大西洋連邦もモビルスーツの開発をすべし。

そして、この一カ月後。

大西洋連邦は、モビルスーツの開発を開始する。

歴史は、確実に、そして大きく、変わっていつている。

第五話【勝利は日ごろの行いの賜物】

プラントは、C. E. 69年9月現在、今だ未完成である。

そもそも、プラントはアプリリウス市を始めとする十二の市によって構成されている。一つの市には十基のコロニーがある予定だ。そう。あくまで、予定である。

現在、プラントにおいて稼動しているコロニーの数は八十基。予定の三分の二しか完成しておらず、現在も新たなコロニーを建造中である。

プラントがある宙域はL5。

L5宙域のあるコロニー群はプラント以外に無い。

ここで、Lポイント。すなわち、ラグランジュLポイントについて説明しよう。

ラグランジュLポイントとは、天体力学という学問にある言葉の一つである。

詳しく説明すると極めて難しくなるため、掻い摘むとしよう。

簡単に言えば、重力の釣り合いというものがとれた場所のことを指す。

例えば、L1宙域。

あそこは、地球と月の間にある。つまり、地球の重力と月の重力がちょうどバランスが取れる場所なのである。

仮に、この宙域にAという物体を置いた場合、Aは地球の重力に引っ張られるが、月の重力にも引っ張られる。その互いの重力の力

がちょうどバランスがとれる場所がL1宙域なのである。

だが、地球と月の間にあるL1宙域、月の反対側にあり地球からは見ることが出来ないL2宙域。そして、地球を挟んで月と反対側にあるL3宙域は不安定な部分がある。

だからこそ地球の国々は、重力の安定性が高く、スペースコロニーを建造するのに最も適すると言われるL4とL5にコロニーを多く作っているのだ。

ちなみに、実際の史実でも、西暦1969年にジェラルド・オニールという人物がスペースコロニーを建設する場合はL4、もしくはL5に建設した方が良いと言っている。

さて、ここで問題となるのは、何故L5宙域にはプラント以外のコロニーが無いのか？ という点である。

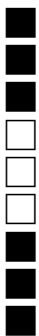
その問題の解としては、やはりナチュラルとコーディネイターとの確執が大きいだろう。

コーディネイターは自分達より能力が低いナチュラルを見下し、ナチュラルは自然に逆らった存在故にコーディネイターを恐れ、徒党を組んで迫害する。

そういう問題があったからこそ、L5宙域にはコーディネイターが多数住んでいるプラント以外のコロニーが無いとされている。

L5宙域にはコロニーは少ない。

この重大な事実を見逃す程、あの男――ZAF T軍事部門最高責任者、アレクサンドル・スターリンの目は、節穴ではなかった。



『ビーコンを確認』

『アプローチ、正常に起動を確認』

『アーモリー01、安定軌道に入りました』

プラントはL5宙域のほぼ真ん中に位置する。つまり、これは逆に言えば、真ん中を除いた場所には何も無いということだ。

ローラシアの艦橋。
ブリッジ

シリウスは艦長席に座っている。
キャプテンシート

だが、この艦橋に普段何時もいる人間——アレクサンドルの姿はない。代わりに、別の人間がいる。ラウだ。

ザラ機関に所属しているラウがここにいる理由は単純に、命令だからだ。

「よし、作業班は直ちに作業を開始しろ。護衛のヴァルキリー中隊、スターダスト中隊は予定通り行動せよ」

『了解です。艦長』

『ヴァルキリー1、了解』

『スターダスト1、了解』

L5宙域の端の方、今、ZAF Tの一团が奇妙な作業を行っている。

本来であれば、このL5宙域にあるのは先にも記した通り、砂時計型のコロニーだけである。

だが、今彼らの視界一杯に映っているのは、砂時計ではない。

密閉型コロニー。L2宙域に多数ある。一般的な島三号型コロニーとはまた違うコロニーである。

島三号型とは、三つの島から成り立つことから島三号型と呼ばれており、L3宙域にあるヘリオポリスなどの開放されたミラーから太陽光を取り込む従来の一番一般的なコロニーである。

そして、それと対をなすのが、密閉型コロニーである。

密閉型コロニーの一番の利点——それはやはり、密閉型であるが故の機密性の高さである。

島三号型は、どうしてもミラーの関係上内部の様子というものが丸分かりというのが難点である。

そして、密閉型コロニーの利点は、密閉であるが故に外側から内側の様子を知ることが出来ない点である。

つまり、密閉型コロニーというのは、軍事拠点としては最高この上ない条件を持つ環境なのである。

そう。今彼らZAF Tが行っているのは、アーモリーO1と呼ばれた一基の密閉型コロニーを安定軌道に乗せて、ZAF Tの軍事拠点として稼働させることであつた。

現在、プラント内部にZAF Tの正式な軍事拠点というのは、存

在していない。

その一番の大きな理由としては、つい先日までプラントは理事国の支配下にあった為、表立っての軍事行動など出来なかった為だ。軍事拠点を持つなど、まず有り得ない。

しかし、プラントに駐留する理事国の艦隊を排除に成功し、いざプラントの市民達を守るという大義名分を掲げ、軍事拠点を作り出そうとした時、大きな問題が発生した。

土地が無い、のである。

プラントのコロニー全ては、何処に何を建てるかという建設予定が既に完全に決まっている。現在建設中のコロニーとこれから建設予定のコロニー全てだ。

そもそも、宇宙空間という最初から一切の生命を拒絶するような空間に人が暮らせるような場所を作るのだ。当然、全てが設計段階から決められている。

だからこそ、今彼らZ A F Tは、デブリベルトにあった廃棄コロニーの一つをこうして再利用しようとしているのだ。

「……それにしても、よく運良く無傷の密閉型コロニーがありましたな……」

「全くだな。だが流石はスターリン閣下だ。これのような物を偶然見つけられるとは、やはりあの方は運が良い」

「……………今のは、本気ですか？ シリウス艦長」

「当然だ。貴官は違うのか？ ラウ・ル・クルーゼ」

そう言ってラウの方を振り向いたシリウスの目は笑ってはいなかった。

余計なことを言うな……というわけか…。
内心でそう決定させるラウ。

だが、ラウの言葉も尤もである。
彼らの目に映る密閉型コロニー——アーモリー01は、廃棄されていたコロニーであるにもかかわらず、損傷というものが全く無い。

廃棄コロニーとは、デブリ帯^{ベルト}と呼ばれる人類が宇宙開発を行って以来集まっているゴミの溜まり場のことである。

そんな中には、ジャンク屋や宇宙海賊といった者達が大勢いる。
アーモリー01は、その中から持ってきたものだからだ。

当然普通ならば、無傷というのはまず有り得ない。どれも、少なからずの損傷があるはずなのだ。だが無い。
普通に考えれば、何か裏がある筈なのだ。

だが、それ以上は考えない。確実に、それから先に待っているのは、ラウ自身の破滅だからだ。

「……いえ、何でもありませんでした」

「Z A F Tの一員であるならば……ん？ ああ、スマン。貴官は向こうだったな…」

「はい。……しかし、今の私は貴方の補佐官。つまりは、貴方と同

じZ A F Tの者ですよ」

最後の言葉、一瞬だけラウは返答に困ってしまった。

というのも、ラウは確かにZ A F Tの一員として働いているが、彼の上司はパトリシア・ザラだからだ。

何故ならザラ機関というのは、Z A F Tの中でも微妙な立ち位置にあるからだ。

そもそもザラ機関というのは、国防委員会直轄特殊部隊という名が正式であり、文字通り国防委員会が直轄する部隊のことである。

だが、ザラ機関に所属する人間の多くはZ A F Tの制服を身に纏っている者達だ。ここで、少しばかり矛盾が生じる。

Z A F T軍事部門——すなわち、アレクサンドルやシリウス達、実際に軍事行動をする者達は、最高評議会の命令を国防委員会を通して伝わる。

つまり、国防委員会の直轄——国防委員会の一部であるザラ機関の構成員達が、国防委員会より下にあるZ A F T軍事部門の人間である。

つまりは、一人の人間が二つの組織に所属しているということだ。

だからこそ、ラウは微妙な反応をしてしまったのだ。彼が今その身に纏っているのは、紛れも無くZ A F T軍事部門の赤服。紛れも無く、Z A F Tの軍服である。

だが、彼にとっては特にそれは問題ではない。所属は確かに二重になってしまいが、彼ら——ザラ機関にとっては、そちらの方が都合が良い時もあるからだ。

「ところで、閣下とザラ機関長のお二人は、本日はマイウススリー

に向かわれているだったな」

「ええ……それが、何か？」

そう。本来であれば、今ここで作業を監督しているものはアレクサンドルである筈なのだ。

だが現在、監督しているのはシリウスであり、ザラ機関からやってきたラウがシリウスの補佐という役割を持っている。

「……貴官は行かなくて良かったのか？ 興味があるのではないのか？ 例のアレに」

アレ。という言葉。その言葉に、ラウは少しだけ眉を動かした。

「確かに、あると言えはあります。ですが、今はここで貴方の補佐をするように、と私の上司に言われておりますので……」

「……そうか」

そう言って、シリウスは視線をさっきまで向いていた方に戻し、ラウも同じく視線を戻す。

彼らの目には、今、アーモリー01の周りに浮かぶ採光する為のミラーが全て配置につき、作業が完了した光景が目映っていた。



プラントにある十二の市の一つ、マイウス市。

機械工学、材料工学、そしてロボット工学が得意分野となってい

るこのマイウス市の一つマイウススリーでは、Z A F Tの新型モデルスーツの最終評価試験を行う予定となっている。

兵器というのは、実に複雑で繊細だ。

今回、試験を行う新型モビルスーツ【Z G M F－1017B】ジンB型はただの従来機体――A型の改修機に過ぎない。

だが、たかが改修機と言っではいけない。

改修というのは、実は新型を作るよりも重要なのだ。

例えば、ある新型機が完成したとする。だが、その新型機が何の問題も起こさずにいられるだろうか？ 答えは、NOだ。

兵器という物は放って置くだけで劣化していく。だからこそ、そうならないために絶えず整備するのだ。

だが、整備するだけでは直らないような欠陥が見つかってしまったら？

新型を作る？ 時間があるわけが無い。だからこそ、改修するのだ。

コストパフォーマンス的にも、改修というのは良い。

元々土台は出来上がっているのだ。改修というのは、元々出来上がっていた土台に何かしらの手を加えるだけ。

ゼロから作る新型とは、費用、手間、時間などが段違いだ。

そして、完成した改修機は今までの機体の能力を受け継ぎ、更に欠点が無くなったことにより更なる性能向上が見られる。

故に、Z A F Tも来るべき開戦に備えて、従来のジンA型の欠点

を補うためにB型という改修機を作ったのだ。

マイウススリーにある試作兵器実験場。

ここで、間もなくB型の最終評価試験が行われる。

「お酒……いる？」

「……馬鹿か？ お前」

「えゝゝ？ サーシャの為に、買ったんだよ。飲んでくれなきゃ困るなゝ」

「お前な……」

観客席の一角。観客席のあちこちにいる武官や文官達とは明らかに違う雰囲気を出す二人組がいた。アレクサンドルとパトリシアである。

「まあまあ、ここは一献♪」

「無論断る」

「ぶー」

「遊んでろ」

「ハイ、遊んでまーす。サーシャで」

「死ね」

言葉だけならカップルと思われるかもしれない。だが、それは有り得ない。

二人の視線は互いに手に持っている書類やパソコンに行っているからだ。

今の二人の会話とて、一瞬も二人は目を合わせていない。

「ところで、B型ってウチに回してくれる？ いい加減、こっちとしてもモビルスーツ欲しいんだけど…」

「ああ、A型は元々少数生産で終わらせる予定だったからな。問題は無い」

「ありがと、これでサーシャを脅す必要がなくなったよ」

「……………うおい」

「冗談だよ。冗談」

アハハ、とにこやかに笑うパトリシアであったが、アレクサンドルはそれが嘘だと理解できる。

……………帰ったら、ちゃんと回すようにしとくか…。

「フン、随分と楽しそうにしているな…」

「ん？」

頭の中で自身の保身の為にパトリシアの要望を叶えてやろうと考えているアレクサンドルの元に派泣けてきた男がいた。

「……………父さん」

「ザラ委員長？ ……それに、ジュール議員まで」

やってきたのはパトリシアの父——国防委員会委員長パトリック・ザラであった。

そして、後ろから続く数人の武官達の中にプラント最高評議会議員の一人——エザリア・ジュールの姿がある。

「久しぶりだな。小僧。また何か企んでいるのか？」

「ハハハ、勿論ですよ」

「フン、貴様らしい言葉だ。隣に座るぞ」

「…どうぞ」

何処か機嫌が悪いのか、パトリックはアレクサンドルと隣に座ろうとはせずに、パトリシアの隣に座った。

その一部始終を見ていたパトリシアはプツと、噴き出してクスクスと笑っている。

「何が面白いんだ？ パトリシア」

「んーん。別に、父さんは相変わらずだなと思ってね」

「フン、当然だ」

「ハイハイ、ありがとうございます」

父親に対してふざけているとしか思えない態度をとるパトリシア

であったが、父であるパトリックは何も意にも介していないようだ。そんな親子の微笑ましく見守るように、パトリックの後ろについできたエザリア達はそれぞれ近くの席に腰をかける。

「ご子息の、イザーク君は……お元気でしょうか？」

偶然、アレクサンドルの隣に座ったのがエザリアだったので、アレクサンドルは彼女に話しかけてみた。

「ん？ ああ、元気だ。この頃は、君にもう一度会ってみたいと言っていたよ」

「ハハハ、彼がですか……それは、嬉しいですね」

「でしたら、また今度ウチにいらしてください。歓迎しますよ」

「それはそれは、ありがとうございます」

出会った当初、エザリアはアレクサンドルのことをあまり良い目で見ていなかった。だが、今の彼女の目はそんなものではない。寧ろ、信頼を持っているような目だ。

「——ところで、小僧。今回のコレは、一体何の真似だ？ 貴様らしくもない」

エザリアとの会話が普通に進んでいると、パトリックが問いかけた。顔をアレクサンドルに向けず、ただ前を——試験場を見ながら。

「いやいや、流石に最終評価試験はこうしてやらねばいけないでし

よう？　これからZ A F Tの兵士達が命を預けていく機体なのですから」

「……その割には、機密というのがちゃんとしていない気がするのだが？」

パトリックが視線を前から観客席の前の方——下の方へと向ける。

下の方にあるのは、テレビカメラだ。アングラ放送といったものではない。堂々とプラントで放映されているテレビ局のテレビカメラだ。そして、スタッフも大勢いる。

これでは、機密も何もない。完全に世界に向けて公開するようなものだ。

「まあ、今更世界に対して我々の存在を秘密にする必要はありません。それに——本命は別ですし……」

「01か……」

「よーやくですからね。今までデブリ帯^{ベルト}で我慢してきましたんですよ。演習とか」

「仕方あるまい。二週間前までは貴様らの存在は完全にとまではないが、秘匿されていたのだ。その程度のこと、今更だ」

「でしたら、今回はお目こぼしを……」

「………良かろう」

「うわー。父さんもサーシャも真っ黒いよ。カラスみたいだね」

アレクサンドルとパトリックが互いに話す中、二人の真ん中に座るパトリシアはニコニコと終始笑い続けていたが、頭の中では今回のこの試験の裏の考えを理解していた。

今回の、【ZGMF-1017B】ジンB型の最終評価試験は、
囧なのだ。

アレクサンドルの言う本命——それは、アーモリー01だ。

アーモリー01の『アーモリー』という言葉の意味は、兵器 Arms
と工廠 Factoryの合成語でアーモリーという意味だ。

このB型の最終評価試験の裏で、現在L5宙域のプラントがある場所から離れたとある宙域で、今アーモリー01の稼動準備が行われている。

そもそもB型は、先のL5宙域事変の戦闘で既に戦線投入されている。

ミズキ・ハシモトが乗っていた翡翠色のジン・カスタムと呼ばれていた機体がそれだ。

ジン・カスタム——B型は既に戦線投入されているにもかかわらず、新型モビルスーツの最終評価試験などと、茶番でしかない。

だが、真実を知っている者しか、それは分からない。

実際に、その真実を知っている者は、ここにいるアレクサンドルとパトリシアに加え、パトリックとその側近達数名。後は、開発した者達と現在アーモリー01を稼動させようとしている者達ぐらいだ。

それでも、大勢になるかもしれないが、今この観客席にいる者の

殆どはそれを全く知らない。例え、Z A F T の人間であったとしてもだ。

「01は、大丈夫なのか？」

「さあ？　ですが、彼らは私の最高の部下達です。大丈夫だと信じております」

「……信じている…か」

「ええ、良い部下達です」

……面倒事を起こすバカは数人いるが……。そんな生々しいこともあるのだが、無論そんなことは言えない。

「おっ、もう直ぐかな？」

パトリシアが左手にある時計を見てそう言うと、ちょうど、ジンB型の最終評価試験が始まるアナウンスが流れ始めた。



【Z G M F－1017B】ジンB型の性能は、A型を何倍もうわまるということはない。

バッテリーの効率運用、機体の推力の上昇や、今まで何も付ける物がなかった右腰部分にマガジンを収納するスペースを設けたくらいだ。

基本的な部分でジンとはあまり変わりはないかもしれない。

だが、改修機というものは先程も記した通り、欠陥を直した機体だ。言うなれば高性能化。パイロットの——現場の意見というものを開発者が取り込んで作った機体。

今までの機体とは、別物と考えるべきなのだ。

『エルスマン隊長、アルファ3、アルファ4共に準備完了です』

「うーし、んじゃ行きますか？ ユウキ」

『了解です』

機体を起動させる。ジンB型に搭載されているZAFＴのOSは止まることなく水が流れるように起動していく。

「こちらアルファ、スタンバイOK」

『アルファ2、スタンバイOK』

『アルファ3、OK』

『アルファ4、OKです』

「よーし！ いいかお前ら！ ここでバシッと決めて、お偉いさん達の目に留めてもらって、ついでに何時も俺達に面倒事を押し付けるスターリンの野郎に、俺達の実力を正當に評価してもらって給料アップじゃー！！」

『アルファ2よりアルファ1へ、お願いします。自重してください』

「だが断る」

『お願いします』

何故かは分からないがユウキはそこまで言うなら、ということでは彼らは落ち着いて試験を始めようとしていた。

デューク達が、この試験に参加しろという命令がアレクサンドルから直接下ったのは、昨夜のことだ。

突然、『明日の正午より、マイウススリーで行われる新型モバイルスーツの試験に参加せよ』という命令を、その時酒を飲みすぎて酔い潰れてしまっていたデュークに代わり、聞いたレイは呆然としたという。

当然の話だろう。新型モバイルスーツの試験だ。もっとも、今まで彼らが乗っていたジンA型と大して差はなかった為に、特に問題はなかったが。



しかし、態々こんな真似をするのか？ ……いや、あのスターリン將軍のことだ。何か裏があるはず…。

レイは分かっている。アレクサンドルがデュークにあまり良い感情を抱いていないことを。

だからこそ、Z A F Tの前身である黄道同盟の時代から所属していたデュークは、他のアレクサンドルの側近達に比べて出世が遅れている。

今回のこととて、何かコチラに知らせたくないことがあるからこそ、こんな役を押し付けられたのだ。隊長は、決して無能などではないというのに――。

『オイ、ユウキ。そろそろだぞ?』

「あ、はい! 了解です!」

いや、こんなことを考えずとも…ここで証明すれば良い。我々は決して無能ではないことを…!

『ユウキ』

「ハッ! 何でしょうか? 隊長」

『……あんま深く考えんなよ。気楽に行こうぜ? 出世なんか考えずに……な?』

「あ……はい!」

『アルファ小队、これより試験を開始します。発進してください』

『了解了解! 行くぜ! お前ら!』

その言葉と同時に、デュークの乗るジンB型が発進する。

「アルファ2、出ます!」



「ほう？ 俺に直接…か？」

「はい、国防委員会に閣下宛にメールが届いたとのことですよ」

ジンB型の試験が始まっている今、何故かアレクサンドルは試験会場ではなく、そこから車で離れていつている。

というのも、試験が始まる直前に、アレクサンドルの部下が緊急の要件が発生したので至急来て欲しいと言ってきたのだ。

「勝手だご承知ではありましたが、プリントアウトしました。こちらを」

「ああ」

車の運転は無論SPの人間がやっている。

アレクサンドルが今乗っている車は、重要人物御用達のリムジンだ。

その後部座席に、アレクサンドルともう一人、アラブ系の男で典型的ともいえる無精髭を生やした男が座っている。

「……………バルバロッサ。これは」

「見ての通りかと……………自分も、来るとすればサハクかと思っておりました故に…」

バルバロッサと呼ばれたその男は、申し訳なさそうに肩を落とす。
だが、アレクサンドルは困惑している。何故、彼らが接触してき
たのか？ と。

「まあいい。向こうがコチラに接触を図ってくるというのは、元々
予定にあったからな。特に問題はない」

「ハッ、では……外交関係のカナーバ議員を？」

「いや……これは、こちらで対処する。一応、伝えておいても構わ
んが……手出し無用とも伝えておけ」

「了解しました。では、会談には我々で？」

「ああ、俺と貴様、シリウス、ドレイク、ウォンに……パトリシア
もだ」

「ミスザラもですか？」

「どうせアイツのことだ。何処からか嗅ぎ付けてくるに違いないか
らな。先に呼んでおいた方が良い」

「了解です。閣下。」

「……それと、アーモリー01は無事稼動したと報告が入りまし
た」

「そうか。では、このままアーモリー01にまで行くでしょう。試
験のほうはデュークが勝手に盛り上げて、勝手に終わらせてくれる
だろう」

「ハハハ、左様ですな」

ハハハと楽しそうに笑うバルバロッサと違い、アレクサンドルの頭の中は未だに困惑していた。それは、ある程度の予想が付いているながらも、完全に不意打ちでもあったからだ。

オーブ首長国連合。

アレクサンドルの中で、この言葉は重要キーワードの一つだ。

地球にある国家の一つ——国土はとても狭い国でありながら、後にこの世界の中でも軍事的にも政治的にも大きな存在となる国。そこからアレクサンドル個人に送られてきた文書。オーブからは、いずれ何らかのコンタクトはあるだろうと、アレクサンドル自身予想はしていたが、それでも別の意味で意外だった。

まさか……この家から来るとは…。

そう。差出人の名前がアレクサンドルの頭を困惑させているのである。

差出人——ユウヤ・レム・セイラン。

全く予想だになかった人物からの、会談の申し込みであった。

第六話【今はまだ、外野の者達】（前書き）

あけまして、おめでとうございます。

更新が遅れたこと、お詫び申し上げます。

第六話【今はまだ、外野の者達】

オーブ首長国連合。

この国は、南太平洋ソロモン諸島にある四つの島からなるこの国は、この世界——『機動戦士ガンダムSEED』において、とても大きな存在である。

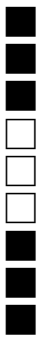
原作において、オーブは最後に勝利した国家というイメージが多くの転生者達にある。

原作において、オーブという国は、この後始まるであろうヤキン・ドゥーエ戦役において、一度しか国内での戦闘はなかった。更には、大戦中においても国有企業モルゲンレーテによって経済は活性化していたという事実があった。

その次の物語——『機動戦士ガンダムSEED DESTINY』においても、先の大戦でモルゲンレーテの本社とマスドライバーを自爆させたにもかかわらず、オーブは復興していた。

それだけではない。オーブは新たに大型航空母艦を建造させるなど、明らかにヤキン・ドゥーエ戦役時よりも経済は発展していたと見受けられる。

だからこそ、オーブにいる転生者達——それも、政府上層部にいる転生者達は、自分達が勝利するであろう未来を守る為に、奔走していた。



暗い部屋の中、一人の男がパイプ椅子に座り、ジッと目の前にあるスクリーンを見つめている。室内には、男の他に一人の女が男から少し離れたところに座っている。女は手元にあるパソコンで、側にある映写機を操作している。

女が操作している映写機から映し出されている映像を食い入るように見ている男は何故か苦々しげな表情だ。何かに嫉妬しているような、そんな表情だ。

そして、約一分程度だった映像が終わるを告げるようにスクリーンは真っ暗になる。

「…………チツ、もう一回だ」

「…………もう十回よ。いい加減にしたら？」

「嫌だ。もう一回」

ハア、と女はため息をついて手元のパソコンを操作する。

そうすると直ぐに、スクリーンに映像がまた映し出される。先程と同じ映像——【ZGMF-1017B】ジンB型の試験の映像だ。

映像に映し出されているジンB型の数は四機。その相手は、地球国家の多くが保有する主力戦車リニアガン・タンクだ。その数、二十七両。

試験開始と共にリニアガン・タンク三十両全てが一斉にその菱形の砲口からリニアガンの弾丸を放つ。無論、試験であるため全弾ペ

イント弾だ。

だが、二十七両という一個大隊の攻撃は、一弾も当たる事無くジンB型は二機一組で左右二手に分かれる。

すると当然、リニアガン・タンクの部隊は敵に対応するために部隊を二つに分けねばならない。

試験会場は何もない平らな更地だ。だからこそ急いで対応せねば、速度が上のジンB型にやられてしまう。

だが、リニアガン・タンク部隊には対応する暇さえ与えられなかった。

ドドド！ と、一両のリニアガン・タンクがペイント弾を受ける。この時離れているジンB型との距離は五百メートルはあるだろう。

この攻撃を受けた一両のリニアガン・タンクを機にして散開していたジンB型は次々に撃ちまくる。

反撃をしたとしても、高速移動しているジンB型に弾は当たらない。

そして、僅か一分程度で、三十両全てのリニアガン・タンクは撃破判定を受けてしまった。そして、ジンB型は一機も撃破判定を受けていない。

結果は、ジンB型の完全勝利であった。

「はい、終了」

女の言葉と共にスクリーンは再び真っ暗になる。映像が終わったのだ。

「気は済んだ？」

「……ああ、一応な……」

今だ納得がいかない様子ではあったが、一応一区切りにしようという意思があるらしく、男はパイプ椅子から立ち上がる。

それを見て、女は手元のノートパソコンを閉じ、映写機に繋いでいたケーブルを外す。

「で？ 何が分かった？」

片づけをしながら女は男に話しかける。無論、先程の映像の話だ。

「……あー、Z A F Tのモバイルスーツって早いなーぐらい」

「………死んだ方が良いんじゃない？ 私にここまで働かせといてそれが感想なんて……」

「んなこと言われても、実際一分なんて短すぎるだろ」

「……まあ、確かにそれもそうよね」

「だろ？ あんな短かったら、何かを検証したくてもできないって一分十二秒。」

それが、この映像——【Z G M F—1017B】人B型の最終評価試験の公開された映像の時間であった。

「ま、積もる話はサイトウ君の所でしましょう。ここを借りていられる時間も、そろそろ終わりだし」

「ほーい、了解しました。アサクラ二佐」

「上官に対してその言い方は何だ？ とでも言ってほしい？ トクシマー尉」

「冗談。幼馴染なんだからいいじゃねえか」

「ま、そういうことにしておきましょう。行くわよ」



オーブ四島の一つ、オノゴロ島。

この島の事を聞かれてまず何を思い浮かべるか。多くの人はこう答えるだろう。

マストドライバー、と。

だが、一部の人間はこう答える。

モルゲンレーテ、と。

確かにマストドライバーの存在は大きい。世界に四つしかない宇宙への入り口であるマストドライバーの存在は、確かに大きなものだ。だが、それ故にもっと大きな存在に気がつかない。

国営企業モルゲンレーテ。

オノゴロ島に本社と工場施設を置き、兵器などの開発、製造を行っている国営企業だ。

本社や工場施設には常時厳戒な警備がしかれており、その厳しさ

はマスドライバーよりも厳しいという話もある。

その理由としては、オノゴロ島の地下に広がるモルゲンレーテの兵器研究施設や開発施設の存在にある。世界から見ても高水準の技術を擁するモルゲンレーテの技術を盗もうとする者は、常日頃から後を絶たないからだ。

そのモルゲンレーテの地下のとある区画を、先程の男女――ユキネ・アサクラと、ジョー・トクシマの二人は、ある施設に向かって歩いていった。

「しかし、ホントここと迷子になりやすいよな？ 入り組んでるし、分けわかんねーし」

「案内板を見れば分かると思うんだけど…」

「残念。俺にはそんな常識通じない」

「はいはい、さっさと行くわよ？」

「へーい」

軽口を叩き合う二人が向かっているのは、新兵器開発研究所と呼ばれるところだった。

モルゲンレーテでは、兵器を開発、研究しているというのは、既に述べた通りだ。

だが、一口にそうは言っても、兵器というのは様々な種類がある。

例えば、拳銃、マシンガン、戦車、ミサイル、戦闘機、戦艦。全

だからこそ、それぞれの分野に分ける必要があるのだが、この新兵器開発研究所というのは、それら既存の兵器とはまた違った新しい兵器を開発する部署だ。



以上のことから推察するに、この男は何日もこの研究所で自由気ままに研究をしていたのだろう。風呂に入ったり、着替えることさえ忘れるくらい。

$$\begin{bmatrix} Z \\ Z \\ Z \\ Z \\ Z \\ Z \\ Z \\ Z \\ Z \\ \vdots \end{bmatrix}$$

彼女が部屋に入ってきたにもかかわらず、男は先程と変わらずずっと寝ている。

ニヤリ、と不適に笑う女はポキポキと指を鳴らしながら寝ている

そう語る男——ランディー・サイトウは先程叩かれた後頭部をさすりながら目の前のソファに座る叩いた張本人に向かってそう言った。

「一瞬何事かと思いましたよ」

「つか、ランディーもエリカさんに後頭部叩かれたぐらいであんな悲鳴上げるか？ フツー」

ユキネとジョー、そして先程ランディーを嬉々とした表情で叩いた女——エリカ・シモンズは共にソファに座りながらコーヒーを飲んでいた。

「あ、これ映写機とパソコン。返すわ。ありがと」

「おお、どういたしましてっ。で？ ジョーよ、何か面白い発見はあった……ああ、言わんでいい。予想はついた」

三人がソファに座る中、ランディーは一人自分の椅子に座り背もたれの上の部分に手を置いてコーヒーを飲みながらジョーの表情から推察する。

「それより、アレは？ ちゃんと出来たんでしょうね？」

「うん？ ああ、アレね？ ちゃーくーんと、出来てるよ。五時間前に」

エリカからアレと呼ばれた物——メモリースティックをランディーが見せびらかすようにエリカに見せ付けると、

「……………へえ」

瞬間、四人の空気が凍りついた。

「……五時間前？　なら、何で出しに来なかったの？」

凍りついた空気の中、エリカは静かにそう言った。

ユキネとジョーは、今すぐ謝れや！！　このボケエエエエエエエエー！！　とツツコミたい衝動に駆られたが、そんなことを言えるような雰囲気ではないので、自分達に被害が来ないことを祈りながらただコーヒーを飲み続けることしか出来なかった。

「……………え？　だって出したら、また俺に仕事渡すじゃん？」

「……………」

「ん？　どしたの？」

自分が犯した愚行に気づいてやっているのか、それとも全く気づいていないのかニコニコとした笑顔でランディーは言った。

「……ハア、もういいわ。はい、それ渡して。出来たんでしょ？」

「うい、出来たどー」

これ以上言っても意味がないと思ったのか、エリカは半ばどうでも良くなったように手を出すと、ランディーはメモリースティックを普通に渡す。

「あの……何が入っているんですか？　それ」

「ん？ ああ、コレ？ 別に、そこまで大した物じゃないんだけど……」

さっきから気になっていたメモリースティック。

それの中には、何が入っているのか気になったジョーはエリカに聞いてみたのだが、答えは大した物ではないと返ってきた。

だが―――。

「短距離熱源探知ミサイル、【VX-1】トリガー」

「……えーと……？」

「それの中に入っている奴だよ」

「……エリカさん。説明プリーズ」

「私よりも、ちゃんとその自称天才君に聞いたら？」

恐らく、エリカ自身もその有用性は上手く理解していないのだろう。

彼女の顔からも説明して欲しいとの表情が窺える。

「【VX-1】トリガー。俺が考えた新型ミサイルだ」

「それが何で、今時熱源探知型にしたのよ？ 普通のでいいでしょう？」

エリカの今の言葉にユキネはあることを気づいた。

もし、従来のミサイルが使えないような状況になったら？ そんな状況が起こるということを、ユキネは知っている。

Nジャマーか…。

心の中で呟くユキネの顔には苦々しげな表情が表れる。

幸い、ジョーとエリカにユキネの顔は見えていなかったが、一人——ランディーだけは気づいたようだ。

「……あら？ ひょっとして、ユキネちゃん分かつちゃった？ 天才である俺の考え」

「え！？ マジで！？ ユキネさん分かつたんですか！？」

いや、ジョーも分かるでしょ？ 私達と同じなんだから…。

そう言おうとしたが、その言葉は結局言わなかった。エリカが探るような目つきでユキネを見ていたからである。

「別に、私の考えがランディーの考えと同じとは限らないだろう。気にしないでくれ」

「そんなこと言わずに、お願いだよ。ユキネさくん」

「……そうね。私も気になるわ」

「いえ、本当に大したことじゃないので、それに——」

ピピピ、ピピピ。と、ちょうどその時、ユキネの携帯から着信音が鳴った。

「あ、スイマセン。ちょっと…」

ユキネは、電話に出るためにソファから立ち上がって少し離れた所で電話に出る。



流石に、少し弄り過ぎたか。：エリカさんもこの頃、俺達を疑っているような目でこっちを見てきているし…。

ランディー・サイトウは自分達——オーブの転生者達について考える。

転生者達は、それぞれ生まれ直後から自我というものがあつたわけではない。生まれてから少しずつ、自我という物を自覚していくのだ。

確かに、生まれた直後から自我というものがハッキリとしていれば、それは生みの親から見ればそれは不気味以外の何者でもない。

自我を自覚していくのは、それぞれ個人差というものがある。そうランディーは考えている。

ある者は、五歳の時に。ある者は三歳の時には、自我を自覚した者もいる。

まあ、そんなことはどうでもいいんだけど。……問題は、サハクの坊ちゃん達、自称オリ主組なんだよね…。

そう。ランディーには悩みがある。いや、ランディーだけではない。ユキネやジョー、他の少数の転生者達全員がある悩みを抱えて

いる。

「ゴメン、用事できちゃった。先に失礼させてもらうわね」

「あら残念、せっかく色々と教えてもらいたかったんだけど…」

「それは今度の機会に、じゃあランディー君、映写機ありがと。ジョーもお礼言っときなさいよ？」

「うーす」

「おう、じゃあなー」

電話が終わり、用事があると言って部屋から退室するユキネを見届けると、

「さて、偶には仕事でもしますかな？」

「あら？ 珍しくやる気を起こしたわね？」

「偶にはそういう日もあるってことよ。後ジョー、お前は帰れ」

「え！？ 何で俺だけ！？」

「お前、軍人。俺達技術屋。お分かり」

「うー、分かりましたよ。映写機ありがとうございました」

「じゃあ、私も行くわ。コレを出してくるから。次からはちゃんと出さないよ」

「はいはい。了解しましたー」

部屋から出て行くエリカとジョーを見ると、ランディーの顔つきが今までの飄々としたものから険しい表情に変わった。

「…………ハア、俺行きたいなー。Z A F Tの幹部見に」

それは、心の底から渴望するような声であった。

今、オーブには二つの転生者の派閥がある。

一つは、ランディーが所属している。五大氏族のセイラン家の長男——ユウヤ・レム・セイランが中心の、オーブを守り続けようという考えを理念とした少数派。ただ、ランディーは所属しているといっても表面的にはあまり積極的な協力をしていない。

コレは、もう一つの派閥——先程ランディーが自称オリ主組と述べた者達が原因にある。

もう一つの派閥の中心人物、サハク家次男——ローム・ギル・サハクの過激的な言動にある。

ローム・ギル・サハクはあまりにも過激なのだ。自身をこの世界の主人公だと信じて疑わない人間。よく言って、テンプレオリ主。悪く言えば、ただのキチガイだ。

だが、サハク家というオーブの中でも軍事にもっとも関係ある氏族の家の次男に生まれたことからロームは大きな力を持っている。このモルゲンレーテとて、サハク家と大きな関わりを持っているのだ。

ローム達の派閥は原作介入をするというのが理念？ にしている。

果たして、それを理念としていいのかどうか分からないものであるが、ローム以外の転生者達はそれを理念と思っている。

ランディーから見てハッキリ言うと、危険以外の言葉が無い。

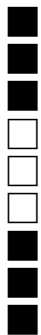
だからこそ、彼は今あのように呟いたのだ。モルゲンレーテの職員の一であり、既に転生者であることが何処からかローム達に知られているランディーは、半ば生かされているような状態であり、下手に彼らに黙って行動するわけにはいかない。

故に、ランディーは彼の友であるユウヤ・レム・セイランからのZAF T軍事部門との会談を断ったのだ。

行ってしまったら、帰ってきて何をされるか分からないからだ。

「まっ、頑張ってこいよ。ユウヤ」

机に置かれている写真——複数の男女が仲良く並んでいる写真の真ん中にいる男にランディーはそう語りかけた。



コッ、コッ、コッ、コッ、コッ、と急ぎ足で廊下を歩いているのはユキネだ。

モルゲンレーテの地下にあるランディーの研究室を出てすぐさま彼女は地上に出て、モルゲンレーテの本社から総司令部のとある一室へと向かっている。

そして、とある部屋の前で立ち止まる。

その部屋は、近くにある他の部屋とは違ってこの部屋の扉には衛

兵が二人付いている。明らかに、他の部屋とは違うことが窺える。

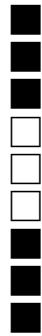
「ユキネ・アサクラ二佐だ。セイラン外交官に呼ばれた。入るぞ」

「ハッ！ 少々お待ちを………はい、分かりました。どうぞ」

ユキネが衛兵の一人に話しかけると、衛兵は持っていた通信機で誰かと会話する。暫くすると相手から許可を得たのか、入室するよう促す。

「失礼します。ユキネ・アサクラ。入ります」

コンコン！ と二回ノックをして名乗ると扉がゆっくりと開かれる。



「いらっしやい。ユキネさん。モルゲンレーテからここまで、早かったね」

部屋に入ったユキネを迎えたのは、優男という表現がピッタリ似合うような男だった。

「いえ、特に問題も無かったので」

「フフフ、そう固い口調で話すな。ここには我らしかおらぬ。もつと口調を軽くしても良いぞ？」

「……………ミナ様までいらっしやるとは…」

優男に対して敬語を使うユキネに話しかけたのは、高級感溢れる椅子に座った長髪の女であった。

だが、ユキネはその女がここにすることに疑問に思う。本来であれば、こんな場にいる筈がない彼女——ロンド・ミナ・サハクが。

「セイランに呼ばれたのでな。始めは断ろうかと思ったが、内容が面白そうだな。来たのだよ」

「いえ、ミナさんが来ていただいて、本当に嬉しく思います」

「それは世辞か？ ユウヤ・レム・セイラン」

「まさか、純粋な喜びですよ。ロンド・ミナ・サハク様」

「ほう？ 私に様付けとは……中々、コレは面白い

優男から様付けで呼ばれたミナは、心底楽しそうに笑っていた。

確かに、サハク家というオーブという国の中でも好意的に見られていない氏族の頂点にでも立つのではないかというサハク家の人間に様付けして呼んだ優男が五大氏族のセイラン家の次期跡取り——ユウヤ・レム・セイランであれば、笑ってしまうのも無理は無い。

「さて、ユキネさんも着いたことだし、そろそろ話し合いを始めるとしますかな？」

その言葉と共に、室内にいるユウヤを除いた四人がユウヤを向く。

「昨夜、私に例の一件の場所が指定された連絡が来ました」

例の一件が一体何なのか、この場にいる者達はそれが何なのか聞く野暮なものはいない。

「場所は―――L3、ヘリオポリスです」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3043y/>

コズミック・イラに転生者多数発生

2012年1月3日06時48分発行